

川柳の雑誌

麻生路郎★主宰

十一月號



Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi No.342

昭和二年七月一日第三號創刊
昭和十三年十一月一日發行第十號
（每月一回一日發行）
創刊大正十三年通卷・三百四十二號



十一月號目次

(昭和三十年)

題 字……………麻生 路郎	源 類 政……………富士野鞍馬…(三四)
表 紙……………米田三男之介	B K 放送川柳……………麻生路郎選…(三)
窓 口 談 義……………麻生 路郎…(三)	★
竹 枝 と 川 柳……………石原青竜刀…(四)	川 柳 塔……………麻生路郎選…(四)
川柳に於ける通俗性 と諷刺性に對て……………飯降 白香…(八)	同 舟 近 詠……………諸 家…(七)
永田都詩子さん を訪ねて……………丸尾 潮花…(六)	近 作 柳 柳……………麻生路郎選…(四)
新川柳鑑賞……………麻生 路郎…(六)	一路集「山小屋」……………黒川紫香選…(二八)
喜ぶのは早い……………長野 文庫…(五)	「宣伝部」……………寺井鋭々選…(二八)
「いのちある句」 を作るために……………北川 春渠…(一〇)	金 泥 集……………麻生霞乃選…(二七)
合せて二で割れば……………不二田三夫…(一七)	各 地 柳 壇……………(元)
抑留所の日本人……………東野 大八…(三)	川柳第二教室
川 柳 茶 話……………直原七面山…(九)	作 句 指 導……………戸田 古方…(三)
道頓堀の今昔……………比日繁治郎…(三)	質疑に答える……………清水白柳子…(三)
不透明の良さ……………麻生 梨里…(七)	不朽洞会から……………(三)
福寿草の芽生え……………八木摩太郎…(五)	柳 界 展 望……………(四)
	公私雑記……………(五)

川 文 化 の 夕

文化の秋。作句の秋です。一夕を寄り集って川柳のダイゴ味に浸るのも亦楽しいものです。是非皆様お誘い合せの上御出席下さい。

日 時 十一月十二日(土)午後六時半
場 所 光明寺
大阪市天王寺区下寺町二丁目・市バス停前(市電・下寺町又ハ日本橋三丁目下車)

兼 題 「エッセイ」(二句)麻生 路郎選
「獨身」(三句)北川 春渠選
「故郷」(三句)戸田 古方選
「髭」(三句)小川 恒明選
三題(当日発表)

柳 話 題 麻生 路郎
柳 評 語 清水白柳子
呈 賞 ★各題天位★路郎選天位に不朽賞
文化の夕の催として短冊展及び交換会を開きますから当日御手持ちの諸家短冊及御自分のものを御出品下さい。

会 費 五〇円
幹事 紫香・淡舟・いさむ
白水・雄声・凡九郎

川柳雜誌社句会部



窓口談義

机下 雑然

麻生路郎

階上の四畳半の隅にある椅子に凭る机と、

くものだと自分でもあきれている。

その次の間八畳の隅にある坐る机と、階下の

階上の机二つは主として執筆に使う。どんなに親しい人でも、こ

の八畳の隅にある坐る机との三つが私の机である。何れも大机で

こへは通さない。光線の関係、気温の関係、

あり、何れも机上はどれから手をつけていいか分らないほど雑然と

屋夜の関係、その時の気分で、この机のどちらかを使うことにしている。

している。これでよくも、何かと片づいてゆ

階下の机は私の応接

が主になっている。ここでも選句や執筆をしないことはないが卓上電話によって阻止されることが多いので、なるべく事務的なものしかやらないことにしている。色紙や短冊の揮毫にはどの机も使わない。軸や額は畳の上で書くことにしている。

ゆくのが好きなのである。

「いつになったら、紫檀の上に本が一冊しかのっていないという生活が出来まんのや」と荊妻がなげくが、おそらく、そんな日は私の生涯には来ないのではないかと思う。私は雑然とした中に生きて

紫檀の机の上に本が一冊しかのっていないという生活は、たまに行った田舎の美しい景色に憧れるようなもので、日目がそれだったら、とても辛抱出来るものではないのと同じではなからうか。できれば文化功労賞をもらった喜多村緑郎氏など、あの年であんなにもゴミ／＼した舞台にたてるものではない。要するに文化というのは、雑然とした中から生れるものだと思う。



豊中市 戸田古方

灰皿を洗うた朝の静けくも

お菓子まで用意したのにやってこそ

妻の意見入れて手紙をかき終える

大阪市 市場没食子

パセリーでないぞと養子儲け出し

神経痛歳だと云われ腹を立て

休むのに朝から市外電話かけ

蚊帳してもて妻の仕事が一つ減り

大阪市 土井文蝶

萬事OK二つ返事が支払わす

いつ死んでも悔なき程に邪魔がられ

ストかいなあたは紋日がふいになり

半年も経てば忘れる程の恋

芦屋市 寺井鋭々

おこつてたというといてやと気の弱し

ネオン一字欠けて四ツ橋寒い雨

ホノルル市 内藤草一郎

子の眼には母の別居が腑に落ちず

黙認をされりやスリルのない浮気

円満の様よと母が見て戻り

動続十年靴のサイズも変らない

名と金へこれでよいかとふと思ひ

こゝかしこ待ち合す人ビルの谷

イヤリング今宵は誰を呼び出そう

東京都 前山北海

豆歌手の嫁ぎへ母の狂気めき

茶の間から舞台へ妻の美が戻り

大阪市 正本水客

ぼろい話間違いだらけの手紙で来

ロビーから見れば綺麗な浜に見え

山紫水明徹夜の組は飯がまだ

例外のひとりにされて気が疲れ

大阪市 丸尾潮花

背を向けて恋の返事を長う待ち

カステラにカルピス窓は秋の色

親子ほど違えば旦那じむさく

嫁しづいてリボンの似合う若さで居

月見草墓参の道をせもうする

大阪市 北川春巢

接吻の映画へガムを噛みつづけ

駅弁もやっぱり不景気だと思ひ

奈良県 尾崎方正

会葬へ君も僕もが薄くなり

目立たない綺麗さそれでも金が費り

小娘も子供を抱けば母の型

大阪市 武部香林

本ものの元祖がアリヤリヤ戸を締めた

真っ白い鼻の化粧が他人めき

老婆は平戸するめの味もせん

下心あつてか長期欠勤し

大阪市 福田妄夢

ネオン消え夜ほんとうの夜となり

女もう取引すんだコンパクト

出雲市 尼緑之助

豆腐屋の煙日の出へゆらぐなり

大阪市 水谷竹荘

瘦せた原因まさか女難ともいえす

へぼばかりよつても将棋大会か

下関市 弘津柳慶

中元のウイスキー妻の留守に抜き

病缺なのに宿酔のせいにされ

兵庫県 小西無鬼

金とりに来ぬとて怒るのも役所

新生ちや象牙パイプが泣きましよう

虫だけを鳴かして主不在なり

尼崎市 小林文月

敬老慰安会

二年後に招かれるのが祝辞述べ

ソフトボール救護班には女医がなり

大阪市 富岡淡舟

姉の死八月十五日亡

お迎えがお盆でこころ残りなく

印押したのが詰腹を切らされた

金盞父の叱咤のように落ち



奈良県 飯降 白香

五尺八寸坊やと呼ばれて気がくさり

眼に見えぬ束縛地位がもってくる

葡萄酒のグラスへ女夢が湧き

サービスのお喋り釣銭は未だくれず

診察場株屋の電話持て余し

奈良県 西辻 竹青

質流れ質屋の方が気が減入り

忙しいのに猫の子までをもらてくる

豊年のおだてに乗った洗濯機

鳥取市 河村 日満

小心翼々として義理をかき

すまぬことそして帰れば針仕事

率直に話せば妻の意に反し

老婦長若先生へ附きつきり

山口市 長野 井蛙

オボチユニストの俺へ味方をするも妻

虚子の軸誰も読めない季語があり

養老院俺もこゝかとふりかえり

岡山県 福島 鉄児

へイマンボ子の行末が案じられ

酔うほどに税務署個人として話し

女房が寝てまんねんと子を背負い

又酒が愚なスリルへ誘う夜

演壇も野次も二つに割れてもめ

御無汰沙のお詫へ嘘も少し混ぜ

夜見てもやっぱり下手な化粧ぶり

膝枕今宵は別な人に貸し

降車口家出娘を見逃さず

脅迫へ一服進めるゆとり持ち

大阪市 麻生 梨里

大阪市 谷内 一草

下関市 阪田 良坊

夜長にも便りを上げる人はなし

冷然と蜘蛛慾望を果しけり

立働いた度胸が社長のお気に入り

台風だ台風だと人間共騒ぎ

結び文先す同性愛から始め

細り行く氷踏切まだ開かず

お世辞やの風向き違う日もありて

岡山県 服部 十九平

綴方此処で鉛筆なめたところ

会社では平で呑み屋に顔がき

苗床でもう優劣がついており

貧しさに不幸を云わぬ綴方

脳の簡素化兎に角今日は寝るとする

岡山県 大森 娛句楽

洗濯機に替える話の早場米

小指程の魚を釣るのに雨に濡れ

誤解され易い酒なら断つと決め

さびしさに克てずに傘をさして出る

布施市 森下 愛論

岡山県 大森 娛句楽

大阪府 山田 季賛

世事うとくそでいていゝ地位に居り

晩酌をむつつり呑めば妻笑い

大阪府 山本 葉光

役得の事にもふれる廻り椅子

若禿をバと呼ばれてシユンとなり

恥しらずでも母であり父であり

花の位置替えて廻診待つ患者

大分県 桑原 養痴園

倉敷市 木村 千容

岡山県 直原 七面山

兵庫県 若林 草右

姫きたかときかれ別れたとも云えず

アベックへ座席を一つずつやり

お隣のことで書いてる子の日記

恥しらずでも母であり父であり

酔ってなんかいるもんですかとマダムが揃み

土曜日の約束を娘は二つ持ち

恥しらずでも母であり父であり



倉敷市 田垣方大

警察の呼出しバレットなど思い
嫌き遅れそれでも嫌なもの嫌

秋淋し婦人脱衣所こわされる

岡山県 岡村牛耕

嫌いじゃないとはじれったい返事

口説かれる予感へビール冷やしとき

石川県 那谷光郎

女子大のキャンプビールも提げて行き

札束へもういものと社長室

親切な傘が届けば雨が止み

ストローに睫毛の長さふと見つけ

雨傘がなくて欠席とは知らず

咲きたけりや咲きなと花へひとりばち

姑は疲れることを知らぬなり

倉敷市 水谷谷水

庖丁の音が少々低気圧

薄給のおかげで整理されず済み

脛までの浴衣へ母の泪ぐみ

家出され子供々々ともう云わず

モデルから見ても見込みのない構図

いりまへん汚職議員じやあるまいし

退社してもう氷屋のおっさんや

遅ればせながらも袖の下もって

裏から見ればサラリーマンのあわれさよ

だによって希望退職せよと云う

恋人になったげるわとおごらされ

倉敷市 相原一善

岡山県 本田恵二朗

子に留守をさせて二人で歩いて見

つゝ立ったまゝで枯れてるなんばきび

月給を運ぶ夫になって無事

ビタミンビタミンと変なものを喰い

戦場を思い出させる雲が浮き

貧しさも底ないとこへ来た安易

岡山県 田村藤波

保険屋に時の推移を説かれたり

失敗を素直に認め見直され

売ろうともしない骨董屋の木魚

乃木さんの勉強されたと云う机

先立たれた女はやるせなく肥える

岡山県 岡田夜潮

大阪府 永田六龍子

奥さんの怪気看護婦続かない

風鈴の音も淋しく旅に病み

埃でも吸うて置けいと高級車

ギャングが死か資本主義に迫られる

乞食の子母に後れて泣きもせず

大阪府 吾郷玲人

岡山県 坂井三葉

中風にとまれば蠅も頼りなし

新婚に邪魔にされても生抜く気

アンケート皆ヒトカドの愛妻家

大阪府 尾野おさむ

海近く甘い手紙をかく机

倉敷市 藤井春日

お婆ちやんでしようと素顔で酌ぎに来る

よう来た膝の小猫を投げて起ち

大阪府 木口賀峰

節水の紙まで貼って妻若し

長男の見栄が老舗を売り渡し

面倒な話が酒を追加する

言い直す言葉がもめるもになり

岡山県 津田麦太楼

ミキサーを隣り近所へ貸すも見栄

半盲の按摩に裾をかき合せ

拗ねた振り睨んだふりのマンボとや

米子市 小西雄々

手離して笑い婚期を気にとめず

よく笑うマダム孤独が好きという

吹田市 橋本幸男

養子来てからの家風がまた変り

この頃はうちの課長もノイローゼ

堺市 高崎雄声

高野山ここともお金の欲しいとこ

クイズもう男女同権行過ぎる

大阪府 吾郷玲人



白壁に夕陽は柿の影を描き

岡山県 岡田青果

生意気な方が私の娘です

冷やかな眼つき税吏と直ぐ感じ

当選の自信二時頃から崩れ

西宮市 若本多久志

噫悲しい哉と代読無表情

見られてるなと女編みつつけ

住友のバツチ綺麗に頭髮を分け

鳥取県 藤井明朗

再婚の話祭で念押され

岡山県 永松東岸子

町議位誰でもなれるように言い

淋しさを秋の小道に捨てに行く

倉敷市 野田素身郎

嘘つく気で帰れば敷居にけつまずき

露天湯で一人で惜しい月をみる

女丈夫だけど恋人には甘え

倉敷市 安原斜木

女など要らぬ器用な生れつき

妻去ってからひげが伸び髪が伸び

吾が家となれば修理の個所ばかり

大阪市 神谷凡九郎

分つたと父は一言云つただけ

大阪市 清水望峰

とまる蚊もかなしそれは義足だよ

大阪府 川端鬼醉

新婚の友を緯名で訪れる

方便と云う逃げる手を釈迦教え

親類へ行つてたことにする家出

過去水に流して妻も薄化粧

大阪市 木村十悟

秋風に女身装りをとゝのえる

大阪市 伊達堰子

能面の様な妓が来て並び

大阪市 不二田一三夫

肥やしとも土ともならん親ごころ

病いの間屋だんねんと灸の数

至る所ライバルがあり世は愉し

兵庫県 酒井ひか平

残業へきつねうどんがもう来そう

父苦い顔で進学許すなり

ソ連の想い出お尻つまんでくれた女医

ナイロンに似たかトンボも薄うなり

片想い窓の灯りを見て帰り

倉敷市 長尾越鳥

現金の家は鰻や鯖が売れ

好きそうに見せよとマダムから云われ

一番見えるところに入れました金齒

倉敷市 佐藤千代春

完全に酔った芸者のほつれ髪

正道が一人の口に歪められ

大阪府 深見雅堂

三朝温泉にて

値切つたを云わすサービス気に食わす

世話好きが嵩じて葬儀委員長

大阪市 野村初甫

洋花の名をきゝナースメモをする

亡妹がはめた奥山来て淋し

同舟近詠

松山市 前田伍健

豊年の祝いを税務署から云われ

恐妻家これも女難とあきらめる

釣りおとす魚に飛びこみそうな腰

京都市 富士野鞍馬

ノイローゼそんな病気があったのか

茸狩に初陣という疲れよう

ノイローゼ周囲の者できめている

長野県 高峰柳児

待ち呆けウインドねだるのを見つけ

寝に帰るだけの吾が家の定期券

今治市 長野文庫

団体にたしか一二個ごまかされ

和歌山県 秋月宏方

幸福な暮し算盤などいらす

負けん気が強いが将棋弱いこと

落選画死体引取るかたちなり

逢う人もないが白髪のひげもそり



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔一九六〕
野球見るのに会社までだ
まし (日満)

野球を見るのに会社を休んで行くことは若い社員にはあり勝ちなことである。

「やあ、君も来てるのか、今日は休みかい」
「なに、休みなんもなか、叔父が死んだと云うことにして出て来たのさ」
「君は？」
「オレもチンポくだよ」
こんな会話が球場で交換されてるとしたら会社で事業のふるわないのもムリはない。穿ちの句である。

〔一九七〕
流行医者エコノミストも
騙っている (春雄)

流行すると金が出る。出来ると更に殖やしたくなるのが人情。相場欄をのぞく。エコノミストを読む。それが医者であろうと学者であろうとそうなり易いことを諷した句である。

医者が経済や政治に首を突

込んだところで、医者で掴んだ金を虚名と交換する位が落ちである。

〔一九八〕
もう一つ蚊取線香をたく
へホ落 (方大)

「二勝二敗だ。決戦をやるうじやうなかい」
と、家族のアクビを無視して又パチリ／＼とはじめた。
流石にエライ蚊には閉口して、もう一つ蚊取線香をたいたと云うのである。

へボ碁の楽しみは門外の人には判らない。この道の熱戦と来たら、碁の一本や二本立てたところでビクともするものではない。

〔一九九〕
買収はされぬつもり
の箸 (多久志)

話があると云うので来たものの、凡そ話しの筋は判っている。判ってはいない、来ない訳にはいかぬ。来たら案の定御馳走が出た。
「どうぞ」
と盃をさされた。まアこれ位

な馳走で、どう斯うと云われることはない。買収に応じさせなければいいのだと心に決して箸を取ったと云うのである。
やがて妓が来る。酔いが廻る。柔かい空気に包まれる。斯くして陥落が目前に迫るのである。買収はされぬつもり「つもり」の語がよく利いている。

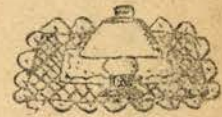
〔二〇〇〕
みおつくし大人が聞けば
まだ十時 (鬼酔)

母性愛がみおつくしの鐘を生んだ。どんなに遊びはあけていても午後十時にみおつくしの鐘が鳴り響くと、子どもたちは母のふところへ帰らねばならないのである。

ところ、いそいで帰宅するどころか、
「まだ十時だぜ」
と云って、ネオンの街の方へ歩を運んだと云うのである。
「まだ十時」の「まだ」が非常によく利いている。皮肉な句である。

〔二〇一〕
退職金の端数が飲め飲め
飲めという (野曹)

停年で退職した人にとつて、多いとか少ないとか云って見たところで、退職金ぐらいい有難いものはないのである。退職が迫った時、椅子にもたれて退職金の予想額を



川柳に於ける通俗性と諷刺性に就て

飯降白香

川柳は俳諧から派生した一つのジャンルである。俳諧は連歌を母胎とする庶民の文学として出発したが、談林・貞門を経て芭蕉によって一応それは高い芸術にまで発展したが、一面中世的な伝統であるわび・さびの精神がとり入れられると随適的な枯淡閑寂趣味は生活の現実的な庶民にとっては窮屈で肌にあわないものになった。封建的重圧の下で苦しみながらもどこかに人間解放のよろこびを求めようとする庶民階級にとってはものと手軽で自由なそして自分達の身近な生活感情をぶちまけるような文学がほしい。このような雰囲気から生れたのが川柳である。

さて当時の作者はこのような社会諷刺を目的とし意識して句作していたであろうか。むしろ警世新奇的な精神で人をあつと叫びたところ、そのねらいがあつたようであるが、こゝに考えなくてはならないことは、その句作にあつては社会人生に対して一定の距離と余裕をもった傍観者の態度をとっていたということである。この傍観者の態度は積極的ではなかったといえ、平安末期の貴族のような現実逃避のものではなく、新兵階級としての自負と優越感をもち、支配階級に屈服していかなくなつたことである。だから諷刺や寂寥観に陥らないで、極めて現実的楽天的でしばしばその中に強烈な批

刺を内容とする文字の生れる土壌であった。社会や生活があるべき秩序に調和しないときや形式化され固定化された権威や伝統に対して新しい現実や人間の真実の相違を突き出しその不調和と矛盾を暴露し相手の価値をひっくりかえすことによって生れる一種の快感や

何通ソロバンに入れて見たことであろう。

いよ／＼うけとって見たら、ま／＼予想に近かった。端数がついていて。せめて、それだけでも飲め／＼と何ヶ所かから声がする。そうした誘惑に打ち勝つことが出来ないので凡人の常である。退職金を握ったサラリーマン心理をしつ／＼と掴んでいると思う。

〔1101〕

子の作文をそれから／＼で綴られる (柳 慶)

あどけない小学生らしい綴り方である。それから、それからの表現に味がある。

横からパパがのぞき込む。

「見ちゃ、いや」

と、両手でふさいで隠す情景まで見える。家庭川柳として嬉しい句である。

〔1102〕

石橋を叩いて戀に見放され (梨 里)

一時的の愛情ではないかしら、だまされるのではないかしら、あの人には既にいい人があるのではないかしらと考えると果てしがない。

恋は盲目でなければならぬ。猪突しなればならぬ。

掴んだら放さぬことである。

疑ってばかりいると、遂には窓から見放されるといふのである。たしかにその通りである。穿ちの句だ。

〔1104〕

秋来ぬとさだかに見えてまだ裸 (静 堂)

秋来ぬと眼にはさやかに見えねども……と云う有名な歌があるが、その引用句である。ところがそれと反対に秋の来たことがハッキリと見えるけれど、それでもまだ裸で暮らしていると云うのである。勿論残暑を詠んだ句である。しかも皮肉な句である。

〔1105〕

これはまあと母を笑わす綴り方 (伍 健)

小学生の綴り方、あけすけに家のことを書いているものにはない。豊田正子はいたるところにいる筈である。

「これはまあ」と母が笑う位であるから、父と母のことをかなり露骨に書いているのである。或は家庭の貧乏ぶりをぶちまけているのかも知れない。そうした内容は三者の想像にまかしたのである。

〔1106〕

アブレだと見たかビールにさそてくれ (梨 里)

アブレ娘はジャン／＼ビールを飲む、タバコを喫う。自分もそう見られたのか、ビールに誘われて見たと云うのである。コレは作者の実感かも知れない。

〔1107〕

同窓会女優がいつも羨まれ (草 一郎)

同窓会での話題はお互に年をとったということであり、家庭に縛られるということの嘆きである。その段女優は羨望のまゝで、

「あんなにかいいわね。いつまでも綺麗だし、それに随分と自由な生活が出来るんだもの」

と云われる。しかし、

「他所の花は赤く見えるものよ。外部からは華やかな女優生活ですけれど、女優にはまた女優としてのなやみがあるのよ。それが判って呉れないことが、どんなに淋しいか知れないわ」

と云う。それが人生だよと、この句の作者が云っているのである。

近ごろではそんなことを問題にする方が非常識だと云わ

れそうである。

〔1108〕

入選のコントが仕事嫌いにし (文 庫)

コントに応募したら真逆入選するとは思っていなかったのに入選した。又応募したら又入選した。とう／＼彼を文芸青年にしてしまった。本職はそっちのけになり、ひまさえあればコントのテーマを考えるようになった。生活に行詰ることは眼に見えていたのに働こうとはしなくなった。よくある例である。そこを捉えたのがこの句である。

判と反抗の精神を秘めていたのである。この批判精神が諷刺性となり通俗性となって発展し今日に至っていると考えられるのである。

今日川柳は非常に広汎な大衆の間に作句されているが、それらの川柳作者のなかに川柳の通俗性というところにひかめを感じ他の文芸に伍して文学的な価値を主張しようとするところからこの通俗性を脱却し、その詩的価値を高めようと努力する傾向がみられるがその意図には同感されないではないがそうなるのと俳句と見わけがつかず、どっちつかずのものとなり俳句の広い象徴の世界をもつことも出来ず日常瑣末な心理主義的な傾向に陥っていくことになって、川柳本来の伝統とその性格を失っていくことになる。

私はこの通俗性にこそ／＼がち／＼と笑いの契機即ち人間や社会の矛盾を暴露する批判の契機があると思う。通俗を通俗として示すことに何の顧慮があるか、むしろ、それを誇張しようと思えるものである。それは現実に密着している民衆の自負であり誇りであるのである。本当の現実批判の目はこのように民衆と共にある中にこそあるのである。現実と密着した通俗性であればこそそれはそのまゝ多くの民衆に同感される大衆性をもつことができるのである。この通俗性は更に諷刺性を与える。

む、現代こそはこの諷刺を最も必要とする時である。単なる遊戯的興味であつた諷刺ではなく、現実に対するリアリスティックな鋭い批判をする庶民的な抵抗でなければならぬし、そこから生れる諷刺であるべきである。この諷刺は旺盛な批判精神を要するが更にその底にはヒューマニズムが深く深くたたえられていなくてはならない。

この意味に於ける通俗性と諷刺性、それをもって今日の現実にたちむかうところに川柳は庶民文学としてばかりでなく、やがては民族解放のための文学としてその伝統は創造的に受けつがれていくのではあるまいか。

ホップのぎいた



アサヒ
ビール



「生命ある句」を 創るために

北川 春 巢

一 社会状況が變化する

こと

「生命ある句を創れ」とは路郎先生がいつも云われていることである。「生命ある句」とは百年も二百年もいや千年もの後まで残って、後世の人をして三嘆膝を打たしめるような句の謂であらう。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ
馬鹿な子はやれず賢い子は
やれず

路郎 夢路
路郎 夢路

などの句は親子の情を詠んだものであって、親子の情には昔も今も変りはなく、又今後とも変りはなくであろうから、生命ある句と云えよう。

一 擲りあゝ人生は和に如かず
路郎 夢路
古くとも僕には仁義禮智信 同

などの句は、永久の真理を詠んだもので、これも生命ある句である。

所が一方に於て、川柳には世の中の矛盾を批判したものや、社会の情勢についての感慨を詠んだ句が多く、世の中の状況が變つて来れば意味が分らなくなったり、諷刺の感じが鈍くなったり、名句も名句とは受取れなくなるおそれがあり、従つて句の生命も長くないわけである。私の句を例にとつて恐縮であるが、

米一升持つて善人氣が疲れ

春巢

その時の感想として、私はこれは時事吟であつて、こんな句は間もなく忘れられるであらう、と云う意味のことを書いたが、果して現在、米の統制を外そうかどうかと議論されてゐる時代になると、もう殆ど何の感興をも人に与えない。たゞこんな時代があつたと云う歴史的考証の価値しか持つていない。

もや／＼がいちどに晴れ

たみことのり 豆秋

の句は、終戦直後に詠んだもので、当時疎開先から飯米持ちで三時間の汽車通勤をなし、大阪へ一、二泊しては又疎開先へ帰つていた私自身の感想を、客観描写したものである。「善人」などとはおこがましいが、そこは作句上の技巧のためと御寛容ありたい。此の句は当時大阪鉄道局の大鉄文芸賞を受けた句で、多くの人に感興を与えたものと云い得る。然し

の句は、大東亜戦争開戦のみことりであるが、あの当時のもや／＼した気分が重圧に苦しんでいた我々の心の叫びであり、あの緒戦の大勝利の感激と共に、此の句をほめて見た時のあの気持は私の忘れ難いことの出来ぬ所であるが、あれから十数年経つた今日、殊に戦後派の人に対しては、当時の状況が口が酸くなる程説明してはじめて分つてもらえるものであらう。

古川柳に難解な句が多いと云う原因の一つは、そういう時代的背景を知つた上でないから分らぬ句が多いためではないかと思う。(他のもう一つの原因である言葉の變化については後で述べる。)例え

ば「柳樽」初編の第一句
五番目は同じ作でも江戸産

れ

の句は、そう難解な方でもないが、この句について私は二つの違った解釈を読んだことがある。その解釈のいずれが正しいかは知らぬが、いずれも成程と思われるふしがあつた。然も当時の世相と云うか、社会状況をくどくどと説き聞かされてはじめて納得がいったのであるが、それでも此の句が柳樽初編の巻頭に坐すべき理由には底飲み込めなかつた。当時の人には感歎おくらぬ感興を与えたことは間違いないのである。

川柳はあくまでも時代と共にあるべきものであつて、時代が移れば、意味が通じなくなり、従て生命が短いと云うことは宿命のように思われる。たゞ人情とか、時代を超越した真理を詠んだ句の中、それも何百句に一句位が生きている句として後世に残るのであつて、路郎先生の云われる「生命ある句」を作ることとは中々むづかしいと云えよう。

俳句に於てはその点、花鳥諷詠である限り、生命は長いと云える。

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

荒海や佐渡に横たふ天の川 同

などの句は、日本民族の続く限り、生命ある句として存続する可能性があるのである。

川柳のうちで最も生命の短いものは、所謂時事吟であらうが、時事吟についてはかつて本誌上でも数氏の討論があり、結局、生命は短いけれども作句に値するものだ、と云う結論になつたと思う。けれども一般作家は時事吟を敬遠して余り熱心に作句しようとしな

待つたなしの歩にさされた
犬養毅 路郎

昭和七年五月十五日の所謂五、一五事件の句である。

二 言葉は變遷して行くものであること

我々の使つてゐる日本語は万古不易のものではなく、時代によつて變つて行くものであることは、国語学者によつて説かれてゐることである。或は言葉そのものは同じでも、その現わす意味が變つて来るのである。このことは勿論川柳のみならず俳句にも短歌にも云えるのであるが、俳句や短歌は主として雅言を以て表現され、文字を見ないで観賞が出来難いものが多くに反し、川柳は所謂平言俗語を以て表現され、耳から聞いた

だけでも充分意味が分るものが多い、と云う特徴のために、川柳の方が言葉の変遷により意味の分らなくなる率が多いことも確かである。金田一京助博士によれば、言葉が変るの、平素口で喋られてる言葉の方が早く、文字階級が文字の上でその影響を受けるのは、必ず時間的に後れるものであるとのことである。川柳は俳句や短歌にくらべてそのような言葉を使うことが多いために、その言葉の意味が変化して、昔の作家の意図が受取れず、今読んで見て感興を感じないと思われる句は多い。

言葉の意味が変ると云う例はいくらでもあるが、(例)田国男著「毎日の言葉」によると、我々が日常使うアリガトウという言葉を例にとりて見る。アリガタイと云うのは、神仏を尊ぶ場合に云ったのが本来の意味である。所が中世以後になると一寸した感謝の意味にも使われるようになった。従て本来の意味と中世以後の意味とは使う場合が違つて来たのである。我々がよく云う「大きに」なども元は「大きに有難う」の下略で、つまり余り濫用するために、つい言葉の形が粗末になってしまい、終には又別に心から感謝の意を表する場合だけに、何か特別の言葉を発明しなくてはならぬようになるのである。一般に敬語は国語の特長であるが、敬意を帯びている形も長い間使っていると敬意がうすくなるために、その上へなお敬意を持つ

言葉を添える必要が生じて来る。昔は礼を云う場合は、目上の人に対してはカタジケノウゴザルと云つていた由である。アリガトウとは決して云わなかった。所が近世は上から下に向つてだけカタジケナイと云う言葉を使い、身分の低い者が高い人に感謝するには専ら「有難う存じます」を使うようになったのであるが、最近には略してアリガトウと云い、又同輩以上に對してそう云うのは、何だか失礼なような感じがするようになって来た。言葉も衣服や道具などのように、使つていくうちに段々と古びて来て、尊敬する人の前には出せなくなる。これが言葉の変遷を来す一の原因力であるが、古びて来て直ぐには捨て、しまわず、これを粗末にして長く使おうとする傾向があるものである。アリガトウが幾分か威張つたように聞えはじめると、下から上に向つて礼を云う時はこれを避けてスマセンと云うようになつた。スマセンもまだ幾分か物足らぬ場合、少しでも丁寧に云おうとして「相すみません」などとも云つてゐる。

他の例ではオカタと云う言葉がある。はじめは貴女の意味であつたが、近世は主婦の敬称として用いられて、方言でオカッサマと云われている。近頃は「奥様」と云う言葉が出来て、これがよい言葉だと思われているが、「奥様」が出来るまではオカッサマがよい言葉で、その分布地域は現在でも全国の三分の二の面積を占めている由である。これがオッカアとなると、自分の妻のみに卑下した使用で、更に一段と落ちぶれると、年を取つた服女だけに用いられるようになって来ている。「奥様」も上流階級の主婦の称であつたのが、現在では長屋にまで普及している。これを「奥さん」と云つても略々同じ意味で、拙吟の奥さん／＼とかつき屋同志なり

も、この心持が分つていないと、大して穿ち味も分らず、時を経ては遂には何のことか、どこが面白いのか分らなくなつてしまふであらう。

「女流」と云う言葉は、女性を尊敬した呼びかけだそうであるが、これはもとが漢語であつて、長い間文章にばかり使われており、これが国語として十分耳馴れてから全国に流布されたものである。が文章の上と民間の口語とは少しばかり違つてゐた。元は身分の高い家の婦人と云う意味であつたのが、現在では都会や港などでは娼婦の女としての呼ばれ方として、到底良家の女性を呼ぶことは出来ない。言葉の墮落と云ふ以上は言葉の変遷の歴史を見て来たのであるが、これを将来に推しひろげて見ると、現在日常使つている言葉は勿論のこと、耳新しい流行語を使つた句を作つて見た所が、果してその句がいつまで生

命を保つことが出来るか、危いものである。例えば「八頭身」だの「ヘッパボン」だの「ヌード」だのと流行を詠んだ句は、成程現在では目新しい句だと讃えられても、生命の長さは保証出来ない。これは前項に書いた時勢の変化と関係のあることであるが、言葉が変遷するものであるからである。現在の流行語は後世に於ては、丁度頼原退蔵先生の「川柳雑俎用語考」のような本で解説を受けなければ、人々には意味の分らないものになるおそれがある、と思われ。

言葉の流行に因つてもう一つ云つておきたいのは略語のことである。現代は凡てがアメリカ化して、P・T・AだのM・PだのP・T・Aだのと盛んに略語が使われている。略語もおそらく生命の短いものと思われる。街を歩いていて看板にD・E・Pとあるのを見た。写真材料店である。又別の店では日本語で「現・焼・伸」と書いてあつた。「現像、焼付、引伸」の意である。川柳にもこんな式の言葉を使ったのがないとは云えまい。成程こんな言葉を使つた句は、一寸見には気が利いてゐるように見えるので、一時は或はもてはやされるかも知れないが、生命の長さは疑問である。新聞にもよく出る言葉に「特飲街」と云うのがある。特飲街の川柳はかなうのである。又「特需」と云うものもある。新聞で一丁広げて見ても、労基法(労働基準法)操

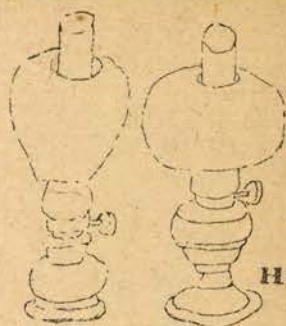
ヒゲソリ後に

アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲソリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

アストリンゼン

桃谷順天館



道頓堀の今昔

比日繁治郎

さしも三百両の金銀を誇つた芝居街、大坂町の道頓堀も、時の流れか人の力か、明治の末から大正へかけて、大きな変遷期がおこされ、劇界の内外、劇界草創の道頓堀も、ガラリと変貌、道頓堀の水の色も変わつて来た。そうした朝夕の變々相を、道頓堀の隅々に描き出せば、おどろくべき、口驚きの物語となる。根がかり、葉がかり、根を重ねてなるつもりだから、お氣に召したる御覽のほどを、小さい聲でお願ひします。

貞享二年竹本座創立以来、幾多の栄枯盛衰を秘めた五座の樓は、相変らず空に聳えてはいるものゝ、内部経営は基礎がぐらつき、仕打ちと稱する興行者も、そろそろ嫌気がさしている頃だった。そこへ京都の興行者白井松次郎が現われた。古い思想に対する新しいものゝ挑戦だ。

そのころ五座の陣容は、西の方から浪花座が秋山儀四郎の株式会社、中座が三榮の三河、角座が高木徳兵衛、弁天座が尼野貴之、朝日座が浅野。但し浪花座もやがて高木徳兵衛の所有となる。いずれを

見ても老將ぞろい、金もあれば腕もあるが、惜しいかな血戦の勇に缺けて、脾肉の喉を濡らそうというとき、こゝへ単騎京都から乗り込んで来た白井は、いまだ若冠三十才、さあこれから五人を相手の白兵戦だ。頃しも明治三十九年二月。初代中村鴈治郎に手引きして貰うて、三榮から借りた中座を居城に戦いの火蓋を切ろうとする。ところが白井とて三十才の血氣盛りではあるが、すでに生誕地の京都では、新京城を根城に、縦横に活躍して、二十六才の明治三十五年正月には明治座を建設し、引き続いて歌舞伎座の新築、夷谷座の買収、四条の南座もやがて買収という興行界の關將としての資格満たことは想像される。

この二月の道頓堀三座の陣容を比較対照して見ると、おもしろい、中座の白井の布陣が、実川延三郎、嵐吉三郎、中村芝雀、中村政治郎、中村珊瑠郎、中村鴈治郎という若手中心の無人芝居。而かも狂言が、第一浪六作『東あさみ』六幕、第二『男重の井』一幕、第三『いろは新助』二幕、午後一時開幕。新作本位の建て方。角座では、市川右團治、嵐橋三郎、中村福助、嵐巖笑、実川延二郎、片岡我当という堂々たる大歌舞伎。狂言が『新薄雪物語』五幕。中『女楠』一幕、切『寿門松』三幕。こ

れでは誰が見ても角座に團扇が上るのは当然で、白井の初陣の戦いは、いかに鴈治郎の人氣を持っていたとしても、勝ち味は無かつたのである。その時、朝日座では当時隆盛の波に乗つた新派劇の福井茂兵衛、小織桂一郎、秋月桂太郎、英太郎、山田九州男、喜多村緑郎の一座があつて『母の心』『魔美人』の当り狂言で、三巴戦となつたのだから、中座の白井は益々不利であつたが、その緒戦の敗軍にひるまず、鴈治郎との握手を固めて、その後古い芝居に対する新しい試みをつづけんとし、必死の興行戦をくりかえしたのだった。そうして四十二年一月、朝日座を浅野から買収して、道頓堀最初の地盤を据えることに成功し、延二郎、成太郎、吉三郎、我童、瑛班などの若手芝居を続行することになり、古い顔ぶれは次第に凋落の一途を辿ることになる。

もとより白井に特別な興行秘策などあろう筈はなく、古い人達の興行マンネリズムを排して社会大衆の心を心とし、旧來の弊風を悉く一洗して、日ごと夜ごとに劇場内外を目新しいものにして、経済を整備し、習慣も情実も踏みつぶして、断行につぐ断行を敢てした。棧敷、孫、出孫、平場、上割、割、という場代の外に木戸銭や水場、(即ち薄田茶番附代)若い者や便所番の心附まで、これでは見物もたまつたものではないが、芝居見物とはそうしたものという習慣に何百年か馴らされた見物は、こゝまでは辛抱して来たが、明治も四十年となつてはもういけな。このことを見物より先に感じ出した白井は、一挙に一、二、三の等級制に改めて一切の雜費は等級の中へ含めてしまった。その為

に劇場へ寄生虫のように喰ひ付いて離れなかつた街の兄ちゃん、忽ち戦を失つて不穩を極めようとしたけれど、さすがにもう警察力は次第に充實して、大きな動きも見えなかつたのである。

舞台端に吊した金巾の引幕は、あばれ腹斗を書き、俳優の紋どころ、宛名を書き、某のひいき筋を記しての毒々しい贈り物。中にはきわどい広告なども入れて、俳優の人氣を誇ろうとするもの、或は額ぶちの一文字、棧敷の膝かくし、天井の大帳、贈りものゝ沢山あるのが人氣俳優という觀念を見物に押しつけようとする無理算段、幕引きの男に心附、場内の飾り付に視儀、甚しいのは芝居の背景にまで広告を入らせて金をとる男、これでは俳優同士の競争も、誠に大人氣なく馬鹿々々しい、直ちに一掃、あとは一本の定式幕と納帳に早がわり。

朝九時や十時から夜の十一時ま

で一日がかりの芝居見物も、多くは幕間ばかりの時間の浪費、こんどは音羽家の出る芝居やさかい、いつ幕が開くかわからへん、いっぺん千日前か心斎橋をうろつこか、こんなことで一時間半も散歩して帰ってもまだ開幕にならない。それもその筈、音羽屋の茶屋へは四、五組もひいきの訪問があつて、話はずんでいつ果てるともわからない。狂言方が二丁（開幕知らせの柏子木）を入れます、と知らして来て、親方は、まだ待ちや、と入れさせてくれない。これが芝居常識。初日二日目とう／＼七日目夫で全部の狂言がそろわない、これも常識。座頭の俳優は三幕目まで顔を出さない、これも常識。十一時で終る筈の芝居が十二時半になるのも常識。この時間の不経済を改めるのはいったい誰の責任か、云々までもなく興行者なのだ。それには興行者がエラクなくては行けない。従来の興行者の多くは座頭の俳優の前へ手をつかえて、芝居興行をさせて貰う位置にあつた。或時は仕打ち座頭前茶屋と協同出資の興行もあつた。前茶屋がよい場所を全部占領してしまつて、とうてい一般の客は近づけない。余儀なく隅っこ席で我慢しなければならぬ、というのがこのうい場合である。前に記した五大劇場主などは追々と興行のわず

らわしさに手をひいて、所有劇場は貸すだけ。実際の興行者は次第に実質が落ちて権威が無く、混乱の状態に陥つているところへ、現われたのが白井である。前茶屋というのは、劇場の前にあるから、芝居茶屋という通称になつてゐるが、芝居茶屋というのが本来の名称である。明治時代にはもう一つの名称に、いろは茶屋、と称するのがある。いろは茶屋の名の起りは、芝居全盛期の徳川末期から明治初年頃までは、道頓堀の日本橋から戎橋の両側に、四十七軒の茶屋があつたので其名が起つたと伝えられてゐる。そうした全盛の余波をうけて、芝居茶屋の勢力が芝居興行の内部にまで浸透してゐるのであつた。芝居茶屋は各々二百、三百という観客層をもつてゐるので、興行が始まる前に何千何万という手附金を入れて置いて、あらかじめ見物席を買い占めて置く。従つて芝居茶屋は観客の意向を反映して、上演狂言に注文を出したり、甚しいのは登場俳優の役割の差図までするほどである。俳優は俳優で芝居茶屋の御機嫌を伺つて置かないと自分の人気にも関わつてくるという有様で、勢力のある大きい芝居茶屋は俳優をまるで出入商人の如く扱つてゐるのである。明治二十五年五月、東京から下阪した名優五代目尾上菊

五郎が角座へ出演する時、やはり慣例に従つて第一番に茶屋へ挨拶にまわつた。フロクコートに山高帽子、という服装は当時の団十郎の紳士づきあいという氣位いから來てゐるので、河原乞食の汚名はとくに返上してゐる筈である。芝居茶屋の一軒に（日本橋に近く）鶴屋という大勢力があつた。こゝへ東京から時々下阪してゐる市川小團次が出入りしてゐるうちに、此家の娘と関係が出来て後に産れたのが、市川右團次（後の青入）で、右團次が初め屋号を鶴家と名乗つてゐたのは其生家の名を襲いだので、高嶋屋の屋号を用いたのは後のことである。大阪一の座頭俳優が芝居茶屋から出身してゐることによつても如何に密接に繋がりがあつたかわかる。

朝の七、八時から夜の十一時まで一日がかりの芝居見物には、氣の利いた見物側にとつてはどうしても芝居茶屋は必要なのである。幕間の休憩から食事の世話、入浴に至るまで万事行届いたサービスは、前茶屋でなければ出来ないことである。それに大阪人の誇りは芝居茶屋が出入りをしてゐることにも肩身が広いのである。新町、堀江、北新地などの遊廓から客と妓を乗せた屋形船が、西横堀から道頓堀川へ入つて来て、芝居茶屋の浜側へ着くと、大勢の若手俳優や女中どもが迎えに出て、下屋の座敷へ案内する。芝居茶屋は浜側から見ると三階建になつてゐて、川沿いの下屋には座敷茶席浴場などが設備されて、茶席が時には男女の艶席にもなるというもの、一階の奥座敷二階の前後二つの客席が幕間の休憩室、だいたいこんな仕組みになつてゐる。芝居茶屋には男衆、女中、小女（通称おちよん）芝居開幕の前になると、客席の棧敷なら後ろへ茶屋の定紋の染め込んだ浅黄のれんを吊つて、特別の座蒲団を敷き火鉢煙草盆などを置く、そうして、おちよんが上草履を持つて御客を案内する。上草履を棧敷裏へ並べて置くのは、お客の出入りに廊下が埃りぼくて汚ないからである。幕間にはひいき役者が棧敷裏から顔を出してお客に挨拶をする。そんなわけで東西の棧敷はいつも芸妓、舞妓の美しいのがずらりと並びお正月には白樺黒紋附の正装で並ぶ。登場の若手役者が芸中にも拘わらず両棧敷へ眼をつかうのはそれが為である。道頓堀の表側から見た前茶屋は軒端に名前を入れた角行燈をかけた、二階の欄干に赤毛氈をかけた風情はまことに情趣がある。劇場

から向う側へ吊り出した無数の小旗は風に翻えり、恰も小旗のトンネルをくぐる思いがそよ／＼に芝居気分をそよ／＼。

こうして一日の飲宴をつくしたお客は男衆や女中への祝儀をやる外、場代、飲食代の全部は月末か或いは二月後の節季払いというこゝになつてあつて、金を忘れた豪遊が出来るのである。

そうした芝居茶屋もやがて劇場が切符制となつた大正初期のころ、十六軒ばかりが残り、映画館が殖えて劇場が減つて行くにつれて、灯火が消えるように一軒減り二軒減り、もういまでは昔の面影を止めぬようになつてしまつた。

一筆者は「赤い灯台」の作問者

疲れたほし体力をつくる

武田の綜合ビタミン剤

パンピタン

30錠・100錠 他に液・末・M・注

武田薬品



麻生路郎選 北川春巢選

ふるさとへ帰れば自信もてる顔 山口縣

石川ひさみ

帰郷して赤いザクロの下に立ち

同

絹こしの様なお手々で握手する

同

ブラカード此処もストする村に

同

嫁の荷にしては寂しい荷が届き

同

置時計女ひとりの部屋で鳴り

同

忘れんがために弾く琴とは知らず 大阪府

早川 野甫

観光地ホテルは背伸びして並び

同

恋愛資金が結婚資金貯めさせず

同

豊作へ貰いたがる子嫁きたい娘

同

棺桶が労働基準法で焼け

同

古畳きびしい家風を淋しがり 倉敷市

藤井 五茶

タンカ切るつもの酒に酔いつ 大阪府

同

墓石の遺産だけは佗びすぎ

同

マネキンに見とれ売場だけつま 大阪府

同

叱られているラジオオヘイマン 同

同

散髪もうっかり出来ぬ程に妬き 同

宗高矢寸志

そろばんは妾宅へ行く匏にも 同

同

歯医者へはあのせっかちが通い 同

同

恋人と歩く歩中に気を使い

同

一姫二太郎製作品のように賞め

同

のれん酒おやち自慢の三杯酢 神戸市

小浜 牧人

ヴェール透かして過去はたのしい 同

同

咳しても一人部屋の壁白し

同

シネマ観る約束もして若がえり

同

新生活運動梅田から歩き

同

芸に身を助けられたへ腹が立ち 大阪市

板東千代美

てれ臭い話になって撥をもち

同

霜やけのしそうな耳でイヤリング

同

ストローが二本残っている別れ

同

やけくそで女映画を見て帰り 大阪市

竹内花代子

子の撥が三味と心中をしそうなり

同

朝せわし小猫のめしもたいてやり

同

教養を二号ごときにあなどられ

同

焼跡の柱草月流に立ち 石川縣

中松 一恒

一人旅淋し温泉すぎきとおり

同

生活力がなどと二十五の娘

同

新柄のネクタイ服がみすばらし

同

ハネムーン鏡のような海に酔い 貝塚市

宮本 甲馬

ヘイマンボ親を小馬鹿にした返事

同

けだものが女将の耳を貸せという

同

心付け願いだ割に置かず落ち

同

職長へ皆むりからぬ愚痴ばかり 大阪市

石田 沐天

職長は酒の肴になってやり

同

分析の結果Wで娶るとし

同

バイトして夜学を卒えて振る警棒

同

もうやめんかと内職へお茶を入れ 愛媛縣

岩川 一貫



竹枝と川柳

石原膏龍刀

雑筆
春秋

十月号の人間横丁に大八君は僕が中国の竹枝(大八は竹詩と書いているが、竹枝が正しい)と川柳とは「全く違ふ」と否定したと書いているが、何かのまちがいでうと思ふ。というわけは、最初北京をよんだ竹枝と川柳との類似点を僕に教えてくれたのが北京通村上知行氏であり、それによって僕は「中国にも川柳的な内容をもつ竹枝という詩の一体がある」ということを知識として人にも語るようになっていたからである。老来? 僕も健忘いよいよ度を加えつつあるので、大八とそんな話をしたかどうかとも憶えていないが、どう考えても、否定するワケはなかったはずだと思ふ。

竹枝というのは日本の漢学者にも知られていて、日本でも作った人が若干ある。一般的に言えば、地方的な風俗を風詠する五言絶句で、「風俗川柳」の内容に一致するものが多く、川柳の本領たるウガチや風刺を内容とするものは少くないのだが、有名な北京風俗をよんだ「燕都竹枝」の中には(前

想である。大学の入試に川柳が取

長野文庫

大体そんなワケで、もし中国の文芸の中に内容的に川柳に似たものをもとめるとすれば、それはどうしても「竹枝」ということになる。これが僕の意見だから大八君の人間横丁は多少訂正してもらわねばならぬ。



無花果が熟れて家中早く起き	會敷市	近藤 千古	派手な恋したし教師の職捨てて	同
二次会のグループ去年と同じ顔	同	同	女湯はモデルの肌と見て呉れず	同
四巨頭につこり笑って株下落	同	同	茜雲高田はこんなよいところ	高田市
健保料勿体ないよな体なり	堺市	辻 圭水	血みどろの闘いぞ基地の弦月よ	同
流行の遅れた服がよく似合い	同	同	二合瓶わが家はタンスふくお酒	同
新生活叫べば白い眼で見られ	大阪市	同	父親の方が娘を嫁り惜しみ	兵庫市
白い歯を見せて小さいウソを云う	同	安井 久子	押し売りが弱氣見抜いた坐り様	同
なぐさめてくれる人あり泣き行	同	同	鮮やかに弾く税吏の小憎らし	同
かたくな心ほぐれるオルゴール	同	同	浮世絵のように爪を剪る二号	岡山縣
恋と云うカメラこの頃忙しい	米子市	勝田 正郎	押し流す時勢へ鯨の重た過ぎ	同
看病の間に縫いあげた浴衣着る	同	同	洋裁の腕も仲人口らしい	同
先生は先生同志米子弁	同	同	仕事は薬夏瘦せもせずすみ	讃岐縣
貧しさに馴れ療養も板につき	貝塚市	阿部かつみ	お達者なことと実は邪魔がられ	同
沸点の相違に愛をうたがえり	同	同	米売ってから支払うと言うラジオ	同
花氷生れが違う席につき	同	同	世の中を黒眼鏡ですてて生き	會敷市
消防の後をスクーターが子乗	大阪市	三木 楨林	金指輪見せて半端な釣を取り	同
口ぐせに今夜のおかず何し	同	同	お刺身かお酢かと庖丁で蠅を追い	同
老眼鏡かけて課長に未だなれず	同	同	いとこで子供がぐるる映画館	高知縣
久々で酔う割勘の唄が出る	兵庫縣	出口白猫児	せねばよい遠慮を連れがして	同
我が道を行く失恋の娘のルージュ	同	同	宗教の押売り欠伸して帰し	同
子の風邪が治り陽氣を取り戻し	同	同	恋は進行中髭は伸びられず	金澤市
病院に暮して糖味噌恋しが	大阪府	藤本 千永	答案は白紙鉛筆よく失り	同
名月は餅屋のビラで子が知らせ	同	同	自転車に稽古けなげな未亡人	同
二号さんも許して闘病一途なり	同	同	なつかしい故郷新茶の匂う駅	同
療養所の枕ゆさぶる盆踊り	貝塚市	小島さぎす	骨董のさびが夜店の灯に浮び	同
不景氣な街を外泊見て帰り	同	同	妾宅の方はすっかり電氣化し	會敷市
油虫のろく秋が深むなり	同	同	台詞ほど教科書読めぬ豆スター	同
ネクタイを妻に任せた髭を出し	熊本縣	淵川 秀敏	おさげ髪明治の恋のたのしそう	同

重要性が認められたことであって我々川柳人としてまことに有難い嬉しい次第だが然し大学入試に川柳が問題されたと云う丈けで手放して喜んで居る訳にはゆかない。と云う訳は問題された句は

西行の涙は月にあきられ

(東大)

雪にぬれ摘んだ若葉を思にき

(同)

梅の花めでであるじに当てこ

すり

(同)

順ぐりに昔のことを恋しが

(同)

神代にもだます工面は酒が要

(島根大)

江戸者の生れそこない金をた

め

(名古屋大)

九十九は撰み一首は考へる

(女子大)

嘘よりも八丁多い江戸の町

(同志大)

何れも古川柳であって現代川柳の匂いは聊かもない。むしろこんなものが川柳だと云われば有難迷惑位である。我々は現代川柳を引用して賣う様にならねば氣に入らないのであるが、果してその時期は何時のことだろうか。

先月号のある有名な川柳誌に「川柳家怒れ日本文学大辞典」と云う句があった。二、三の人に句意を尋ねて見たがどうもハッキリ分らないので直接作者に問合せた処、「日本文学大辞典には俳句の作家の名は沢山あるが、川柳人の名が見当たらないのでこれに対する



無力ですとはサラリーマンの愚痴
底豆が跛ひきく逢いに来る 倉敷市
豊作で飲助の妻もう案じ
汗の金はたいてサービスして貰い 岡山縣
洋裁にも行けず附録で縫うて着せ
行列の先頭になる不安 大阪市
復職
日曜が恋しい生活に又戻り
宿題にかゝれば暑休終りなり 大阪市
あの頃の夢古本にまだ残り
渡り初め真面目くさつた老夫婦 大阪府
護送する犯人に情けの深帽子
云うとこで言わす帰つてきよばやき 貝塚市
病む窓へ踊りの太鼓夜もすがら
看護婦に裸まかせてベッドバス 岡山縣
故郷へ毯藻のように帰りたし
ハンケチで乙女心は雨を除け 鳥根縣
生卵飲んで多忙に甘んじる
扇風機の圈外内気な汗を拭く 岡山縣
逢曳のスリルへ星が尾を引きぬ
褒章を貰うた手芸で細く生き 唐津市
別々に聞けば別れるとは言わず
見るだけのスタイルブック回覧す 岡山市
Yライン女患の胸が淋し過ぎ
宿浴衣着れば知性が抜けちまい 米子市
親友も落目とみえて無愛想
青春は楽しノートも恋の歌 貝塚市
大胆なポーズで番号意志表示

同 野田 一念
同 宗森とも子
同 山本 立児
同 本多 省三
同 堀 須賀太
同 平山 潜雨
同 及川 南洋
同 木村 俊昭
同 梶尾 節子
同 新岡回天子
同 小野花団子
同 湯原 一机
同 竹内 啓坊
同

あそこでもキャンブしてきよ天の川 京都府
口髭をはやして料理の講師なり
揚花火フット戦災のことにふれ 岡山縣
療養へくにと変らぬ虫が鳴き
念仏の鐘が聞こえて酒まづし 愛媛縣
喜ばす気の高値の土産叱られる
内職代まづ買うてやる参考書 大阪市
夕焼けに雑念もなく目をほそめ
これでもかこれでもかとウエストを締め 岡山縣
頭痛膏貼つてサンマにいぶせられ
また若い課長か僕は生字引 岡山縣
奥さんの御機嫌通り客が去に
骨張った母が一番達者なり 橋本市
給料日繰上げ旅行の日が決り
雷へスイートホームの灯が消され 玉野市
豊年をもうあてこんで父は呑み
朝寝して蚊帳の吊手にたたかれる 鳥取市
始業ベルやおら煙草に火を点ける
煙突がもうかりまっせと吐いて居る 大阪府
民主化は警察までがネオンなり
代返もしてやりノートも見せてやり 池田市
明日のパンも無いのに戸締りだけほする
正装にまだ未練ある土用干 七尾市
整骨院坐臥さまざまに順を待つ
せめて夢をとスクーター時間借り 大阪府
改造へ三等大臣口をきき
挨拶はよいが肥桶だぶつかせ 出雲市
電報に慌て階段踏み外し

同 柿本 古竹
同 舞島 白露
同 鳥井 川島
同 酒田 清子
同 岡崎 一也
同 田淵 正平
同 岸本 木魚
同 星川 陽石
同 北村 三步
同 岡島 孤舟
同 太田 木声
同 前浜嶮多路
同 谷沢 好祐
同 久家代仕男
同

不滿の句である」との返事に接して暫らく開いた口がふさがらなかつた。川柳作家が斯うした川柳を作つて居るから文学辞典にも人名辞典にも掲載されないのではあるまいか。良い作品を天下に示し、秀れた研究を発表すれば川柳家も文学史にどん／＼名が出て来る。今井卯木、西原柳雨、岡田三面子、井上剣花坊、阪井久良俊氏等は文学史に残つて居るし、やがて大曲駒村、關原退藏氏及び山沢英雄なども文学史上に輝くであろう。

だから古川柳が少しばかり大文学入試に出たからと云つて有頂天になることはない、俳句が末期的様相を呈して居るから、これから川柳時代だ、などと云う「棚ぼた」を期待することなく今こそ路郎師の「生命のある句を作れ」と云う箴言を改めて肝に銘ずべきであらう。

合せて二で割れば
不二田 一三夫
民、自のちも寄る予算案を合せて二で割つて解決したあたり、代議士式、山分け式、日本式政治の面目躍如たるものがある。

米ソのイデオロギーを合せて二で割れば右派社会党のような政党が出来上るのではないかと言つ



原子力の世に雨乞の太鼓鳴り 岡山縣
この頑固この辺からが老境か
慰謝料が取れると分り離婚する 岡山縣
脅迫は寸志の包に手も触れず
牛の恋家畜保険所員で事が足り 岡山縣
三行の求人へ履歴書殺到し
カルモチン おなかの ややもともに吞み 伊丹市
宝くじ当たったような治験例
根気よく勤めた父の鼻太し 西宮市
アンコール夢の国から立去れず
ヘイマンボスカイト ト 跳 は リボン は 貝塚市
癒っても口あるじやなしソレ王手
小切手に眼鏡を替える慎重さ 米子市
ナイロンを通し毛脛のすさまじい
秋日和肺を病めるを忘れそう 貝塚市
ヘヤトニツク買えばオツム をなめられ
オシドリの年は気にせぬ老夫婦 貝塚市
洗濯機まだく下ると買気なし
役得の酒でおぼえた奴さん 鳥根郷
曼珠沙華野良着の恋に陽が沈み
整形へ刺青いびつになって癒え 貝塚市
はち切れる若さの尼僧を哀れが
恋人と別れて道の暗いこと 岡山縣
盆踊り下手くそがいて情緒が出
儲けてる話の中で事務をとり 青森縣
青森駐在員になりて
りんご喰う事が仕事のうちになり
月光に臍まで濡れて涼み台 貝塚市

米 豊年
同 池田 古心
同 佐々部 藤佐志
同 小川静観堂
同 徳永 貴美
同 河揚 梵鐘
同 福代天邪鬼
同 村田 五耕
同 奥村 芳城
同 景山 綾美
同 護川 梢月
同 坂手 有子
同 森本黒天子
同 福島 丁丙

みんな身に付けよと土用鰻喰い
代議士も来てスクラムヘケン を 笠岡市
看護婦にもてゝ病の身を忘れ
プレゼントかるく受けたが気 こ 兵庫縣
秋風にふさぎの虫に取りつかれ
敬老会ぐらいで母は感激し 倉敷市
新聞も雑誌も漫画だけは読み
合併の愛目人員整理され 倉敷市
儲かりまへんと自家用車を飛ばし
豊年へ夢物語 芋の つる 京都市
長生をしてよかつた嫁素直
富士の山おりに涼みの団扇かな 愛媛縣
十国のいなづまを見て富士の夜
附添が横になつて叱られる 廣島縣
父ちゃんを唯信じてる給料日
労資疲勞大煙突は無表情 出雲市
清貧へ青年達が今日も来る
出猪に二三日分の叱言云い 愛媛縣
牛の値が話をほぐす初対面
ゴルフして来てもやっぱり御出張 山口縣
儲かった事何時迄も覚えとり
のろけにももう驚かず子が二入 東京都
念仏を唱える母の背を拜み
逆夢にならず危篤の報せ来る 神戸市
恋人を乗せたベタルの軽いこと
麦飯を食うた母乳でよう育ち 岡山縣
月世界など死にとうないことば り
シャッターへ日傘の握りようが あり 愛媛縣

同 木山桃仙坊
同 前川 越山
同 山本 閑人
同 小野 広志
同 当野みのる
同 横田 放人
同 山田スミ子
同 竹原 雲平
同 藤田 博人
同 安平次弘道
同 石居 高志
同 西田 幸
同 沼田 三六
同 米沢 曉明

た人がある。理想的政党が生れる
筈なのに、選挙では点が稼げな
った。

◇ 保守、革新とも合せて二で割
ることに新聞紙上を賑わせている
が、一部の人以上はソッポをむい
ているようである。

◇ 男勝りと女の腐ったようなの
が、W+MとかM+Wという新ス
タイルで流行りだした。W+Mな
ら一つの活字を逆さにしても読め
そうである。

◇ 水府先生が、短歌、俳句は朝
刊、川柳は夕刊というような事
書かれたが、私はそれでいいので
はないかと思つてゐる。川柳はあ
くまで夕刊的で、会社帰りの電車
の中、一家団らん夕食後、夕刊
をひろげる楽しさは庶民の天国で
ある。難解な文字のら列してある
短歌や俳句よりも、川柳のほうが
疲れた心身を洗ってくれるに適し
てゐると思ふ。川柳の夕刊的、そ
れは川柳の宿命ではないだろう
か。合せて二で割る必要はない
と思ふ。「わび」と「さび」は朝
刊に、「わさび」は夕刊に。

◇ 割勘で飲んで食つて持金を合
せて二で割つて支払えば、いつも
金のある方が損をする。こんな世
の中が来ないものか。

私の両親は、ともに五尺に足り

庭石は羽振りきかした時のまま
栗の皮懐にして子の良心 宇部市
神軽痛かおそそうかと人の口
夏やせてヒップウエスト娘云う 大坂市
好男子とは金ばなれを云う女
退院の見送り療友の顔白し 大坂市
現実の厳しさ知らず退院し
ブレーキがかからぬ恋も四十代 今松市
思い出のボストンバックが綴入
病窓も日曜日には気がゆるみ 西宮市
極楽はやっぱり我が家と見つけ
慰める側が酔うてゝからみ出し 神戸市
リアリストですちやちな恋はせず
三ヶ月寿命を延ばす約手書き 宇部市
お八ッ代膨脹させて子は肥り
宴席でジュースを飲んでいたわ 東京都
体験のじむ訥井聞きはれる
恋人の好みききたいプレゼント 岡山県
鈍感と言わす善人としておだて
教えたり教えられたり胃の薬 笠岡市
夜なべして目覚かけて女房寝る
水商売女標札出しておき 岡山県
細う長う子故に生きてそれでよし
手形日のあせり買手につけ込まれ 廣島県
旅便り家でも欲しい情を見せ
療養もいいねと元気なやつが言い 玉野市
療養の秋へ涙がもろくなり
アル中で死んで本望だったとは 岡山県

同 神田 豊年
同 三好 澄泉
同 塩浜 一路
同 越智 一水
同 瀬崎 白鳩
同 佐藤 盛気楼
同 岩原 滔川
同 奥津啓一朗
同 池田 文女
同 木山 遠二
同 佐藤龍山坊
同 高島 玉兎
同 三宅こうじ
同 大橋 游子

洋裁が上手で玉の輿に乗り
秋茄子に食慾すゝむ妻達者 京都市
食慾へカツギ屋毎度有難う
きざみまで成り下がったがと赤字 鳥取県
催促のように梨の出来尋ね来る
腕組んでくんで社長は慾望に生き 大坂市
おしやべりへとう病人背を向け 山口県
真白の縋帶うれし外科医出る 東京都
男なんかに負けるものか女意地 大坂市
肩の荷が降りて俄かに白髪増え 大坂府
青葉若葉妻の手をひく山の上 大坂市
蠅叩きながら無心をことわられ 笠岡市
養鶏場産め殖せの餌をやり 宮崎県
コンパクト自信のついた音でしめ 大坂市
若夫婦母の聞き耳知って居り 大坂市
美人女医噂も立てず嫁さおくれ 下関市
きつと来る予感へ炭をついでまち 岡山県
手術する僕が母を元氣すけ 松江市
酔う程にマダムの膝膝打ちて 大坂市
えはがきへ新妻小さくするサイン 兵庫県
肩組みしナースは他人月を観る 大坂市
亡き妻のイメージ抱。秋刀魚焼く 岡山県
恋しきは虫の声さへ雨ときき 岡山県
浄土への読経スクーター。駈つて来 大坂市
ジャズ踊る程上手くない盆踊り 米子市
豆スター口へ文字に弾いている 岡山県
手術待つ間は別な世界に居 大坂市
月寝めてから御馳走へ箸をつけ 岡山県

同 本谷ただし
同 岩田天保銭
同 石本 一子
同 岡本 鳥石
同 下岳 周村
同 加藤 晴代
同 神田 秀峰
同 佐々木十三子
同 木山 二路
同 野口卯之助
同 後藤 志津
同 児島与呂志
同 宗貞 白馬
同 田中 明
同 橋本白郷子
同 植村客遊子
同 辻 文平
同 長谷川兎風
同 大石 一久
同 龜井 星浦
同 正口 辰始
同 木村 紅帆
同 小田 紫草
同 滝井 貴州
同 泉 木太八

ない似たもの夫婦である。災難なのは私である。弟妹はやゝ人並に近い身長だが、私は五尺二分よりない。私だけが両親に似てしまったのである。既製服が間に合わないだけでも一生を通じて大きな損害である。私の拙い句に

既製服今更知った親の恩
優越感小さな男の傍へ立ち

というのがある。少年の頃、よく思った、自分がお嬢さんを貰う時は、うんと背の高い人を選んで、私の少年時代の劣等感を手供らに味わせたくなかった。

現在妻は五尺三寸ある。女学生時代は大女でとおっていたそうである。お蔭で中学三年の娘は五尺二寸以上、一年の末娘は一寸強ある。初孫は一年一カ月で体重三貫という大型である。私の悲願は二代、三代へと達せられて愉快である。大女の妻、小男の私ともに既製服が着られないので、この損失が貧乏世帯に強ひかっている。たゞ惜しいと思うのは、うまく合わせて二で割った子供達が、美男型の私に似なかった事である。但しこの美男型というのは、世界二十何億人からタッタ一人、私を選んでくれた妻の言葉であることを附記しておく。

川柳茶話

直原七面山

K村の丸尾家と井上家(何れも



P.T.A. さまあまふ夫人ばかり寄り 天理市
 陳情熱遂にアメリカまで伸びる 貝塚市
 張替たえ障子は二階又貸す気 大阪市
 ブロースがあんな行儀にしてし 大阪市
 足音へ性教育の本を閉じ 岡山縣
 友あり遠方より来る観光地 新潟縣
 田舎そば都会の味になって売れ 大阪市
 待つのが嫌いで空いた医者へ 神戸市
 螢光灯青い畳に新世帯 石川縣
 虫籠を子に贈られて父は病み 貝塚市
 まだ親の光が届く椅子におり 岡山縣
 委任状持った代理の強い腰 大阪市
 同窓等の禿げて来たのを妻に云い 貝塚市
 義理で飲む酒が家計にまでひびき 大阪市
 ひさかたの募参バツタに迎えられ 玉野市
 秋蠅のおちつきはらうにくらしさ 岡山縣
 女中以下皆先妻の娘へ味方 貝塚市
 煎豆の器量を差別して食われ 岡山縣
 大臣になれば放言したくなり 愛媛縣
 街録へボス見えすいた嘘をつき 貝塚市
 手を止めてあんま政治へ熱を入れ 岡山縣
 面会日しんどいけれど顔を剃る 貝塚市
 谷あり川あり耳の形の面白さ 大阪市
 ○号で結構青春楽しむ気 貝塚市
 花火持つ手を又母が持ってやり 岡山縣
 公約がウラン探しに変わって来 大阪府
 形見分けの話になってお茶が冷え 岡山縣
 注射よりお灸が効いた日本人 米子市

岡田 梅林 婦人会会長さすが世故に長け 愛媛縣
 堀井 一峰 踊る足嫁もお盆と云う軽さ 岡山縣
 西本 保夫 是々非々で町議孤立になるもよし 大阪府
 中西 花香 秋最中月へ小瓶で買いに行き 呉市
 藤田 美雪 秋祭耐で無いのをいづくれ 堺市
 高野 不二 口紅もうすぐ家庭の人となり 宇部市
 丹波 太路 ラブシーン娘の扇子ハタとやみ 徳島縣
 光安比加留 三十にもなって初恋とは淋し 岡山縣
 松高 秀三 お土産がきいたか妻は背を流し 岡山縣
 伊藤 飄一 豊作の晴着末の子までとどき 尼崎市
 岡 一門 一日中蠅たつきした日曜日 大阪市
 川口 秋香 お茶漬けが欲しい駅弁つづく旅 牛久保市
 中畑とん吉 道々で背腰を延ばす寺参り 尼崎市
 入口 富夫 水筒にお酒も入れて寺参り 尼崎市
 渡辺あきら 妹の美味い料理で高くつき 出雲市
 阿倍 四郎 肺病んで五年株の値踏んでみる 米子市
 竹内雨季舟 家庭不和又十代を自殺させ 岡山縣
 浜口志賀夫 割勘の恋で十代楽しかり 鳥取縣
 富永 建朗 着飾って芋掘りにゆく夫人連 京都市
 鈴木 鈴彦 肺切の宣告覚悟はしてました 天理市
 野田 太郎 女房にははがゆいほどに素直なり 大阪府
 阪本あきら 隨筆を書いて教授は名を知られ 大阪府
 池戸 桃村 借りられる断り家の恥も云い 奈良縣
 杉本 一鶴 面会へだけの灰皿置いて病み 大阪府
 山田ゆき江 鈴虫も居間へ来てなく我が山家 徳島縣
 石田 昭月 さすが都市たばこ拾いで生きのび 和歌山縣
 池上知恵子 療友に名残を惜しみ出る患者 貝塚市
 舟木 八糸 三っ指をつかれ挨拶ドギマギし 玉野市

堀内 曉風
 殊川 夢川
 青柳扇子仙
 青木 微醉
 田中 狂二
 平田 実男
 奥村 久寿
 西山 晴々
 出原 真奇
 真野 逸風
 榊本みのる
 越智 義夫
 林 澄子
 山崎さつ子
 三吉 美好
 遠藤 風車
 藤原 秋月
 横山 生二
 木下凡太郎
 阪本 遣通
 北野 水楓
 中谷ハナ子
 木村 喜勇
 半田 夏生
 奥村 芳朗
 田中 雄峰
 浜口 静
 堀内 乱醉

仮名)は遠い昔から、言葉一つ交した事のない犬猿の間柄でありました。
 丸尾家は代々東部落の権力家であり、井上家は西部落の権力者でした。
 この起りは、なんでも六、七十年前の干ばつの時の水喧嘩に初まつているとのことです。
 以来両家の人間は前述した様に、色々の村の会合で或は路上などで、直接顔を見合せることがあつても、決して口をききませんでした。
 その両家の人間が不思議なことには、川柳が同村に普及されるに及んで、何時とはなしに、然もどちらともなく、お互に誘ひ合つて句会に出席し、肩を叩いてとても愉快に現在の家主同志は談笑し合つており、村人もその様を見て心が否、村全対が明るくなった気がすると申しています。
 この事実を川柳の功徳と言わずして、なんと表現出来ましょう。
 正に川柳美談の一つであります。
 明るい村の建設へ！
 明るい町の建設へ！
 明るい都市の建設へ！
 川柳は大いに与つて力がある様です。
 柳人として本当に喜ばしい次第ではありませんか。
 丸尾家と井上家の平和はK村の平和であり、引いては岡山県、日本



抑留所の日本人

東野 大八

人間の心が一番素直で美しいときは、お互いが同じ環境で、同じ様に金がなくて、目的がすべていっしょという時である。私はこうした人間と、まる一カ月も集団で生活した。戦争に敗けて、帰国すべく天津の抑留所で暮らしたときのことである。

どんなに財産家でモノ持でも人間一人が持てるだけの品物しか身にもてず、貴金属や金は所持禁止、あるのはたゞ祖国日本へ帰るだけ、というのであるから全くききにのべた条件とビッタリである。

在華十年、二十年で海外雄飛の念願かなっていかにか一カマ起した人間であろうと、最早敗戦後の中国ではルンペンに毛の生えた一人間にしかすぎない。数えるほどの衣類と日用品をリュックと、両手に下げるトラントに一ぱい詰めたのが全財産であるというわけだ。憤怒、悔恨、呪詛、絶望、自棄の限りをつくして、偽々蓄財したお金持連のこの耐え難き感慨に比べ

るとき、はるかに気が楽でうのうとできるのが貧乏人諸君である。食うや食わずのその日暮しの人々ほどそうなると、鼻唄まじりで、金持連の残していった品々でいゝ帰国土産を作りあげたものである。こうなると、敗戦帰国という現実には理想的な富の均等をやってのけた一大革命である、ということができる。

こんな実話があった。二人の兄弟がいて、兄貴の方はせつせと夜の目も寝ずに金をため、家を作った。弟の方は仕事はしてもその金は朝から晩まで暮らした。ところが敗戦と同時に、財産は没収され、蓄めた金はインフレで兄貴の方はべちゃんこに参ってしまったが、弟の方は飲みどく、遊びどく、おまけに裏につんどいたビールや酒空瓶が思わぬ金になったといふから、昔の修身の教材といたわけだ。

戦後、北京の物価は殺人的高騰を示したが、私の知人のKだけ

は、泰然自若として少しも騒がず

だった。というのは、彼の勤め先は西直門外のS印書館で、敗戦一途の戦局から終戦まじわからこゝで金の印刷をはじめたのだ。一元十元百元五百元の四種類である。いかに日本が敗れたとはいへ、一朝一夕にこの連銀紙幣と俗に老票という国府紙幣と取換えるわけのものではない。よしそれは東の間のものではあると、立派に通貨の役目は果している。たゞ大米一升が二千円、安タバコ一個が五百円というインフレ値であるだけである。しかしKにとってはその様なことはへのカッパである。毎日輪転機に載っかっている印刷物を、まるで映画のボスターでも頂戴するようにつかみごつそりと貰ってきて、家でその一枚を十六枚にきると、一枚一金五百円也というわけだ。

「まあ一ぺんやってきてみな、何百人という職工諸君がね、眼の色かえて自分の月給を印刷しとるんだからね、気合のかゝっている

ことつたら話の外だよ」

しかし私はいかに訪れてみる勇氣をもたなかった。そんな凄じい光景を眺めるには私はあまりにも善良であつたのかもしれない。見学にきたら土産に一貫目や二貫目は……なぞといわれれば余計不安にとりつかれる。

抑留所の生活は、私にとってまた一つの貴重な体験であつた。五間ほどのアンペラの床に、十家族がクシにつながつたメザシの様にたつて寝るのである。どこかの若嫁さんと床を並べて、惱ましい寝言をきいたと思えば、みずしらずのヤカン頭の底ぬけに高いイビキや歯ぎしりをきかされるといった具合である。こうした一カ月の生活には、あてがいぶちの代償として使役に出なければならぬ。使役とは、所内の穴掘りや倉庫の整理、溝掃除などである。日軍と中国側の二つがあつて、みんな中国側の使役をイヤがる。日本なら適当に息抜きさせてくれるが、中国側はカシヤクないまでにコキ使われるからである。

倉庫整理には、私たちはよく仕事の中に、衣類の交換をやつたり小物類をくすねた。新品の軍用シャツを手早く下に着込んで、純毛の手袋や靴下をカッパラうのである。元日々商事の市役、元日々会社の部長、課長なども私たちと一緒に、埃だらけになつて毛布や

外套の束を担ぎ廻つたものだが、その人たちははじめは道に外れたクスネ方を遠慮していたが、終いにはこちら以上に達者になつた人もある。食糧倉庫の使役には、立派なこの人たちが、ボケットに一つかみの米や大豆、小豆の類を入れてきて、不寝番のおやつに飯盒でこれらを煮ている図は、もうツボクな一個の人間の貌であつた。

抑留所に集ると、戦犯指令というのがある。日本軍閥の手先となり対中国工作にカレン誅求を加えた連中を中国側が捕えて裁判にかける、いわばその指定人物である。その抑留者の群は一つの別棟に入られていてるわけだが、そこには名前だけ指名戦犯人に似ているために、足止めを食つた、という気の毒な人もいた。偽中国政府育成に奔走した小西修という人物が、なんと生後三ヶ月の赤ん坊で、その子をかゝえたお母さんが途方にくれている、という笑えぬ悲劇もあつた。

「裸一貫できたおれだ、もとのフンドシ一つに帰るのもまた面白い」

と云つていた老人があつたが、身寄りの少ないこの老齢の身を日本にたどりついたらどう生きていこうとするのか、それを思つて私は索然となつたりしたが、隻手になつたわが身にその時の私はまだ気づいてはいなかったのである。

川柳第二教室

作句指導

戸田古方

研究題「擬声語を使って」

人間のつかう言葉のうち一番原始的なのがこの擬声語でしょう。

擬音語、口真似語といつてもよろしい。人間は複雑な音を出すことの出来る口と舌をもっています。その口と舌でいろいろの物の真似をしはじめたのがことばの起こりだときいています。子供のしやべりはじめのことばをきいてごらんさい。どれもこれも擬音語が、それに類することばです。今日はその子供にかえつたつもりで素直にものまねをながめてみましょう。

井戸端会議の句が目につきまし

ベチャクチャの長さへ井戸は
腰を据え 春也
ガラ／＼と笑い井戸端賑やか
し 登

「ベチャクチャ」といゝ「ガラ



ガラ」といゝ、いずれもよく風景をうつしとっています。

「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」の音はつばをはきかえすようです。し、「ガ」「ギ」「グ」「ゲ」「ゴ」の音は「ゲダンゲン」というドイッ語がいかにもごつこつしているようにおしやれ気や優美さと縁遠いようです。二句とも上品だといえませんが井戸端会議という雰囲気を表わすにはまことにうまい見つけどころです。

ところで「ベチャクチャ」の句は「ベチャクチャ」というただで話の内容まで伺えますし、「井戸」というのも水のわく井戸そのものでなく、井戸端会議のメンバーをあらわしています。省略です。省略は川柳にはよくつかわれますが、この程度が限度で度がすぎると句意不明をまねき、句品もおとします。

かろ／＼連添う妻を空車

ばち／＼これで協力した
つもり

「ばち／＼」はそろばんでしょう。か。「かろ／＼」は車の音でしょう。か、どうもはつきりしません。

又さきに引例した内のあとの句「ガラ／＼と笑い」にはちがった味があります。「ガラ／＼」というのは勿論人の笑い声の擬音でしょうが、私は井戸のつるべのガラ／＼という音を思ふのです。そうするとこの句がいつそう面白くなつて来ます。

いわゆるモンタジュンといいますが、組合せの妙です。「ガラガラ」ということばを中継として井戸端会議の人々、空気と井戸つるべの音が同時にきこえてくるじやありませんか。

気まぐれに雨落したり照らし
たり 柳叟
ぶつ／＼叱言ふら／＼主人終
電にて帰り 登
モウ／＼と涎を流す貨車の牛
雄声

米兵へミヤオ／＼と猫甘え

「ガラ／＼」の句の外こゝに集めた四句もそうした組合せの面白さをそれ／＼みせています。

モンタジュンというのはソ連のエジエンシュテインのいい出した映画の手法ですが、川柳にも表現が短だけ大いに取入れられていゝ工夫です。

誰が気まぐれに雨を落したり照

らしたりするのでしょうか。そんなせんざくより句の面白さを味わいましょ。そして「落したり」「照らしたり」の「したり」のくりかえしは対照であり組合せであり、対照することによってお互に強調し合っているのです。

「ぶつ／＼叱言」の「叱言」と「ふら／＼主人」の「主人」、この「主人」と「叱言」は直接合っていないようですが、叱言で奥さんを象徴するとすれば「主人」と対照となり得ます。それに「ぶつ／＼」の「ぶ」と「ふら／＼」の「ふ」とは同音でこゝにリズムらしいものも感じられます。

次の牛と貨車は「モウ／＼」という擬音で組合っています。句主は牛の方だけのつもりかもしれませんが貨車という字から煙突から煙をはく機関車が連想されます。

最後の「米兵へミヤオ」は勿論本当の猫ではありません。動物の猫なら只それだけの句にすぎませんが、パンパンとしますと巧みなモンタジュンになって来ます。ニヤオといわずにミヤオといったのも甘え工合な点です。

ギーガッチャンリンの役目も

する自転車 春也

ギーガッチャンはギーガッチャンではありません。関西人特有のねばつこさが時をえています。半丁もさきからギーガッチャン、ギーガッチャンとやってくるボロ自転車の音がきこえてくるようです。

かわった擬音で、ある程度成功し

ています。

稲刈のキラ／＼と鎌動く
夏猫子ヨチヨチと箱を出る

などとはくらべものになりません。ぬる／＼とうなぎ必死に身をものがき

アドバールンふわりふわり客をよび 素景

梧桐ザワ／＼秋の窓となり 牧人

常套語ばかりですがこれらにかわる代用語も見つかりそうにもありません。

トトト朝の餌をやり 雄声
十四音にもみたくない字たらずです。「トトト」のくりかえしが四音であることは一寸調子に不安を感じますが、五音にすると写実にすぎで、この句のよさを失います。

蝗とりヒヨヒヨイとつかまらず 豊年
この方は「ヒヨヒヨイヒヨイヒヨ」と三度繰返しにしたい句です。

／＼上かんやヘイヘイとさからわす／＼という句を思い出したからもしれません。

「ヒヨイ」は「ビヨイ」とすると蛙、「ビヨ」だとすると兎です。やはり「ヒヨイ」がよいでしょう。

次は比較対照の句としまして井戸掘は上り家根屋は下りて喰い

と比較の句の悪い代表もあります
が、

女関に位い負けせぬように立

ち 福造

洋館へ先祖の槍のおきどころ

豆秋

こんな名句もあります。何卒御精

進を。

研究題「比較対照の句」

締切 十一月十五日

発表 一月号予定

授句先 豊中市本町三丁目二〇一

戸田古方

質疑に答える

清水白柳子

定型について

▼一部の川柳専門誌に二十字以上もある川柳が発表されて居ります。十七字でなくとも矢張り川柳として認められて居るのですか。御教示下さい。 大阪 山田生

マ簡単な問題でありながら非常にむづかしい御質問です。到底わづかの紙面では言いつくす事が出来ませんが、この欄は第二教室でありますので、その立場からお答え致したいと存じます。

川柳は十七音字が基本律であります。これを定型と言つて居ります。今更申上げるまでもなく古来から七、五調が一番日本語にふさわしい音律として歌に句にうたいつがれて来ている訳であります。その五、七、五の音律を吾々は捨て去ることが出来ないのです。川柳の形態は十七音律を

はなれては成り立ち得ないと思つて居るのであります。ですから句は必ず定型に詠むように心掛けて、あらゆる場合に練習してゆくことを忘れてはならないと思つて居ります。十七音字に詠むことに苦しみ、句を推敲してゆくたのしさに川柳作家としての醍醐味があるわけでもあります。併し句の構成上どうしても十七音字に納まらない場合、たまたま十八字、又は十九字に詠まれることもありませんが、これは推敲に推敲を重ねた上で、句に強みを持たせるとか、句語の關係上で句を詠むのに難渋を感じない程度に限られて居ります。本当に止むを得ない時だけでありまして、これを破調の句とよんで居ります。

どこまでも定型を守つて行くべきであります。御指摘の二十字以上の句も川柳専門誌に発表されて居るのでありますから、川柳ではないとは言ひ切れませんが、すくなくとも奇をてらつた川柳であり、好ましくない形式であります。定型川柳に依つてより以上の詩がうたわれる様に苦心して作句にまつてゆく所に川柳のよさを感じたいと思つて居ります。

時事川柳について

▼川柳としての時事川柳の価値、及、時事川柳の作句だけで川柳人として精進すべきでしょうか、御指導をお願い致します。

岡山 光岡早苗

マ時事川柳は、非常に生命の短かいものであります。夕刊にのつた事柄は翌朝はもう古いと言つた性質のものであります。

時事川柳はいくら多く作句されても、作句を永くつづけられても、将来作家自身の生活記録としての句は殆んど残らないのではなにかと思ひます。

旺盛な作句慾をそつた生命の短かい時事川柳を作るために無駄に費されて居るのは大きな損失であります。その作句意慾を生活を通じての川柳へ向けられたならば必ず立派な川柳が残る筈です。

現在の世情を、吾々の生活を川柳として残すことは、昭和三十年の人情風俗をうつした大きな意味で

の時事川柳として後世の人は見てくれると思ひます。

作家として殊に初心の方が時事川柳ばかりを作句されていると句が荒れます。それはニュースの關係上推敲する時間的余裕がないので作り放しになり、どうしてもドギツイ表現になり易く、狂句じみた句になり勝な弊害がありますので、時事川柳だけの作家として進むことは止めて、常道を歩む川柳作家として精進される事をのぞみます。

マ質問は川柳に関する限りどんなことでもよろしいが、一度答えた事には答えない。又、調査を要する様な問題は回答が多少遅れることを予め御承知置きたい。御質問は「大阪市天王寺区宰相山町一四七・清水白柳子」宛

BK放送川柳

課題「古本」

佳作

麻生路郎選

橋本市 岸本木魚

金儲けよりも古本ばかりため

大阪府 柴垣三吉

虫干にハナハトマメの本が出た

大阪市 不二田一三夫

古本を妻はきたなくつまんで来

芦屋市 里田一十

古本をまですまつする未亡人

神戸市 酒井成和

父に主義持たせた本はこれらしい

西宮市 福島郁三

主婦の身の月おくれええ説なし

大阪市 石田沐天

売れ残る名著に連い世のテンポ

岸和田市 中野三四郎

なつかしい本を開けば紙魚が逃げ

兵庫県 吉原紅月

亡き父の句が残る語本

新潟県 高野不二

目方なら処分出来そう父の本

宝塚市 井元案山子

園点や欄外に亡父羅如たり

福山市 斉藤和子

好事家へ別の棚ある古本屋

堺市 八木徳子

古本を著者にはすまぬほど値切り

徳島市 美馬義明

古本もデパート惜しみなく包み

神戸市 傍島静馬

ベストセラー古本屋にも儲けさせ

河内長野市 大杉春吉

古本で見ると大井川肩で越え

入選第二席 兵庫県 酒井ひか平

古本屋読むと言えぬ暖をする

入選第一席 神戸市 大西十九一

医書売りに来れば目のきく主人留

守

(タル十二)
頼政の三位まつたくひろいもの
(#一〇三)

頼政の位はほんのひろいもの
(#三九)

頼政は三文ほどがひろいた
(#九)

源三位あくせく二合ほどひろい
(#二三)

椎の歌から這上る源三位
(#一六二)

また、二回の歌を併せて、六十二字でもうけたは源三位
(タル六六)

とよみ
もう一度ねだると二位になるところ
(タル一一九)

とうがっている。
椎の木で榮え茶の木でおわる也
(タル十二)

は、宇治で自刃したことをよみ、
椎の木を祝ふ頼政恨む會我
(タル九)

と、曾我兄弟の父、河津三郎が、椎の木蔭から射られたことを併せて詠んでいる。
文道で三位武道で女房なり
(タル十三)

歌で三位までのほり、ヌエ退治で萬蒲の前という美人を妻に頂いたのであった。



福壽草の芽生え

八木摩太郎

堺は昔から、奇妙な人の出る所である。茶人の利休、歌沢の隆達、曾呂利、浪六、曾我廻家五郎、王将の坂田、牡丹花吉柏、謡本の車屋道悦、商家出身のキリシタン大名小西行長、河井醉茗、西蔵探見家の河口慧海、浄瑠璃の春太夫、女形名優中村富十郎等がある。女飛行士も出れば、女のレスリングの選手も出ると云う、変り種の出る所である。

村と云った頃の安養寺に居た鉄幹と、往復して以来天稟の情熱の歌は燃えに燃えて、「明星」によつて歌壇に曉名を馳せたのであるが、堺代表の日本的歌人鳳しゅうはしゅうを晶と改めて、与謝野家の人となつて、晶子の名を不朽にしたのである。

わが柳屋のヒロイン、葦乃女史も、堺の変わり種の人である。路郎先生の序文の中にもある様に、俳句や和歌を作る女の中に、川柳を作る女性、しかも、明治末葉と云うから、確に変わり種であらう。

路郎先生のよき伴侶者として、柳屋の巨星となられたとは云え、堺の伝統の意氣、南蠻渡来の貿易港「堺」に、しかも、函館、青森、弘前まで、商取引をして、販路を弘めた、交易功労者、河盛仁平家に生れたこと、父を川柳家河盛声村翁に持たれたこと、紀州御殿医の娘さんを、母に持たれたことなど思うと、川柳界に大をなされ、其著「福壽草」の芽生えるのも、偶然では無いと思ふのである。堺が産む変わり種の中に、川柳の闊秀作家の巨星が生れるのも、又、豈偶然ならんやである。

堺は昔から、奇妙な人の出る所である。茶人の利休、歌沢の隆達、曾呂利、浪六、曾我廻家五郎、王将の坂田、牡丹花吉柏、謡本の車屋道悦、商家出身のキリシタン大名小西行長、河井醉茗、西蔵探見家の河口慧海、浄瑠璃の春太夫、女形名優中村富十郎等がある。女飛行士も出れば、女のレスリングの選手も出ると云う、変り種の出る所である。

わが柳屋のヒロイン、葦乃女史も、堺の変わり種の人である。路郎先生の序文の中にもある様に、俳句や和歌を作る女の中に、川柳を作る女性、しかも、明治末葉と云うから、確に変わり種であらう。

大阪市民文化祭

第七回大阪市民川柳大会

日時 昭和三十年十一月十三日(日) 十時開場
会場 毎日新聞社講堂(三階)

司会 西尾 栗(川柳雜誌社)

北川 春渠(川柳雜誌社)

大阪 市

開会の辞

挨拶

映 画

休 憩

講 演

兼 題

同 題

同 題

講 演

兼 題

同 題

同 題

講 演

兼 題

同 題

同 題

閉会の辞

呈 賞

兼 題

締 切

授 句

先 着

授 句

先 着

授 句

先 着

授 句

大阪市長賞並に教委賞其他(出席者優先)
兼 題 授 句 用紙官製はがき一枚に付き一題二句宛
締 切 十月三十一日着便のこと
授 句 先 大阪市北区中之島・大阪市教育委員会社会教育課内
市民川柳大会係宛
大 阪 市
共 催 大阪市教育委員会
大 阪 市
後 援 毎日新聞社



永田都詩子さんを

訪ねて

(女流作家訪問記9)

丸尾 潮花

鶯鷗川柳人の異名で通る六竜子夫人、都詩子さんは、夫あり子なしのお二人暮らしだけになお睦しい生活を送り私達に見せて下さる。その都詩子さんを、北同心町の自宅にお訪ねして二、三川柳への御感想をお聞きすると、大阪市の教育委員会から頂かれた賞状を見上げながら天位に入賞された当時のことを思い深そうにお話しになる。好きな作家は、霞乃女史、花村、一瓢、ひさみさんだそうである。嫌いな句は、あまり技巧に過ぎたものだとしやる。都詩子さん御自身の句では、

「でも主人が有つてはあきまへんわ」と笑っていられるがなかなかお若いものを持つていられる。「潮花は今、都美さんと豆秋さんが不朽洞会を家庭の都合で止めはると言う挨拶状が来てましたけど、何でだすやろな、長い間川柳であれだけになられた方がね。此の間も都美さんにお遊いまして近ごろ会へも来はれしまへんし、お尋ねしましたら、職を探してますのんて言うてはりましたけど、都美、豆秋さん言うたら路郎先生の直門ですのに、先生も淋しがってはいらまへんやろな」

「都美さんは本年停年退職されてから、不朽洞会を退くと云つておられましたが、路郎先生は、折角長い間の川柳生活を棒にふるの、は気の毒だからとおっしゃって、都美さんの立場を作ることに努力されましたけれど、あれ程の先生のお気持も汲まずに退めてしまわれたのです。別にお二人が不満を表明される理由は何もありませぬし、矢張り御家庭の都合なので

しよう。そう考えるより他に考え様もありません。私も色々の事について先生に遺憾を述べましたが先生は、都美や豆秋はあんな人間ではない。あれは潮花君、樹を呑みすぎたから頭を悪くしたんだよ。と云つて、それでもまだお二人をかばつていられました。先生のご愛情を都美、豆秋両氏に知って貰いたいと思ひました。川柳の看板はずされたらお二人も淋しくなられるでしょう」

「本当にお気の毒だんな」

話が当面の都美、豆秋問題に横切りをしてしまったので話題を元に返すことにした。

「都詩子さんは子供さんを欲しいとお思ひになりませんか」

「別に思へしまへん。と言うことは私が兄妹八人もいまして長女だったもので、さんく子供に困りましたので、やろ、主人は子供は好きですけどやかましいのが嫌いですねん。子供が無かつたら七十過ぎまで長生きでもしたら困りますやろけど今はそれほどにも思つてえしまへん」と主人の愛情に満足されていられる様で羨しい限りである。

「よく川柳人の方からお宅は同じ趣味でよろしいな、いつも二人で会に出かけられますしと大変羨しがられる方が多おますね。」

「うらなぞ川柳会に行くと家内が気に入らんようです」なんて言うたはりますけど奥さんも御主人の趣味をもつと理解してあげて欲しいと思ひますわ」

「其点は同感ですが川柳の名目で遊興の過ぎる方もある様でしてね。六竜子さんなどはそんな事はないでしょうが」

「それでは奥さん達も責められしまへんか」

「一概にはね。婦人友の会へ何か御意見がありましたらお聞かせ下されば」

「別にあれしまへん。潮花さんにおまかせして置きましたら、それでよしおます。発展を祈つてます。」

お話はつきないが大分夜も更けたのでこの辺でお別れして夜の街に出た。

川・婦人友の会

小規

一、純正川柳の研究と会員相互の親睦を図ることを目的と致します。

一、川柳・婦人友の会は女流作家で結成し、川柳愛好者であることと条件と致します。

一、年二回吟行又は小集茶話会開催、各地女流作家訪問、等を致します。

一、毎月課題が決まりましたら往復はがきで御通知申上げます。入選句は「川柳雑誌」金泥集欄に発表します。選者は霞乃女史が当られます。

一、川柳・婦人友の会には左の役員を置きまして会務を運んでゆきます。

理事 一名
幹事 三名
庶務 若干名

一、会費毎月拾円(六ヶ月以上前納のこと)

但し、会費は毎月の課題御通知の為の郵便費に当てます。送金は切手代用可。

大 阪・名古屋・伊勢を結ぶ…

近鉄特急

座席指定・ノンストップ

大 阪—名古屋 2時間48分
大 阪—宇治山田 2 時 間
名古屋—宇治山田 1時間40分

大阪上六発	名古屋発	宇治山田発
7.40 15.40	8.00 16.00	8.47 16.47
8.40 17.40	9.00 18.00	9.47 18.47
11.40 19.40	12.00 20.00	12.47 20.47
13.40	14.00	14.47

本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道

不透明の良さ

麻生梨里

私はかつて死ぬ時に後悔の残らない死に方をしたいと考えていたことがある。然し、そう云う生き方は、一面進歩性のない生活だとも云えると思う。「後悔先に立たず」であるにもかかわらず、後悔を先に立てようとするのだから、息をするのにも考えてするような用意周到さが付いて廻る。そう云う窮屈な生活の中から手も足も出さぬ事がない。後悔のないと云えば聞かぬはいいけれども、

その底を叩けば騒ぎの後に来る苦しみを怖れる憶病さなのかもしれない。昔から失敗は成功のもととも云っているが、大いに失敗すれば、転ぶべしである。転んだら起きたらいい。しかも世はスピード時代である。考えている間に実行して転んだら、いつ何時でも一から出直す勇気がなければ時代に取り残される感がある。第三者的に見ても赤ん坊をそのまゝ大きくしたような大人と云うものにはおおよそ魅力もないし、その儘人世を終るとしたら、その人自身にとってこんな不幸な事はないと思う。

斯くのいふ人世と云うものは丁度一点の曇りもない透き通ったガラスの冷たさだ。ガラスの曇っているのはあまり感心したものではないが、それでも此処にガラスがあると云う程度の曇りはあった方が、厚みも温みもあつてよいと思う。人世の苦しみもなめ、また時には人から、なんて馬鹿な事をするんだらうと云って笑われる様な事もしてこそ、人間らしい人間にもなれるのではないかと考える。句を作るにしてもそう云う大胆さが必要だと思う。少々叙法が下手でも思った事をズバ／＼詠めたら本望だと思う。「永年作句していて、まだあんな下手な句を作っている」と他人に言つて貰うのもまた良いかなである。

金 泥 集

選 乃 霞 生 麻

課題「時計」

時計とまつたまゝの連休日 定美
頼りない時計へ何時かと聞かれ 有子
田に出たら腹の時計で屋にする 文子
おしやべりは時計みて又しやべりだし 花鶴美
ピンチ救う時計何度も蔵ぐり 梅林
腕時計して、時間を気にもせず 操
不眠症柱時計の位置を変え すみ代
飲む会は時計無用の物となり ハナ子
吊り皮をにぎる女の時計見る 糸潮
三十年ニッケル時計を地味に持ち 千永
一秒の猶予もならぬ朝支度 芙蓉
すべり込み門衛だまつて時計見る 一栄
プレゼント身分に過ぎた時計が来 千代美
新婚を可愛く起すオルゴール 若菜

大体は合つてる管と言う時計 梨里
飲み過ぎのあしへ時計を置いて 花代子
空襲も知つてる時計まだ動き 都誌子
腕時計持つていたのに乗りおくれ 知恵子
土百姓きちんと戻つた腹時計 登志子
出勤を時計と妻に追い出され 清子
亡き父の時計何時まで生きても 白香
嫁ぐ娘に亡妻の時計納れてやり 桔梗
虫の音と時計のリズムに暮れる夕 美知子
時計買つた金の貯金が又出され 京
夜なべするミシンが時計忘れ きさ子
腕時計に済まぬ失業まだ続き 富士子
斜陽族へ昔の音で鳴る時計 同
惨事偶ふ様に時計の止り様 同
大時計霧にかくれる別れの日 乃

麻生霞乃著・米田三男之介装幀

福壽草

定価二百五十円
送料 三十円
菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生霞乃女史の黒色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいたて居ります。

★毎日新聞（大阪）評——著者は「川柳雑誌」を主宰する麻生路郎氏の夫人で、柳歴四十余年といえは女流川柳家でも最古の一人。最近三十年の句から選んで初めて個人句集として出したのが本書である。福壽草松にしたがいそろかし飲んではしやめても欲しい酒をつぎ、デパートを出たら灯もつき雨も降り、フィクションのない叙情詩的な作品に秀れたものが多い。

★山陽新聞評——山陽新聞川柳欄の選者、麻生路郎氏夫人霞乃さんの句集「旅人」と一対をなすべきもので、福壽草の名は「福壽草松にしたがいそろかし」の川柳から採られたものであるが、この句がよく夫人の性格をものがたり、この句集のバックボーンとなつていく。霞乃さんには「飲んではしやめても欲しい酒をつぎ」の名句があることは早くから知られていたが、今女史四十五年の作句生活から、珠玉の五百数十句を一本に集めて見て非常に興味が深い（略）何よりも一貫して流れるヒューマニズムと詩情はこの句集をして一層高いものたらしめている。（T）

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五の二五

電話住吉（一）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番



集路一

山小屋

黒川 紫香選

山小屋で二人無口になつた霧 鳥石
御飯あるのぞと山小屋の雨きれい 遊歩
山小屋の夢征服の峯に立ち 井蛙
山小屋へ蛾が迷い込んだ通り雨 一乗
山小屋のこんな所にあるポスト 保夫
夜に疲れ屋の山小屋寝てばかり 一机
イニシアル書いて山小屋別告 須賀太
山小屋の前までバスが登つて来 春也
山小屋が一層寂しい峠道 素飄
山小屋の夜のランプへ大きな蛾 トン坊
山小屋で夫婦気取の飯がふき 晴々
山小屋へへた／＼と坐り込み 富士子
山小屋の灯が重い足は／＼とさせ 黒天子
霧重く垂れて山小屋まだ寝てる 静観堂
山小屋の枕に虫の音が近く 正郎
山小屋へきたきた牌も／＼と来て 比加留
山小屋に山百合の香がよく匂い 雄声
山小屋で聞く雷の恐しさ 一恒

ガス灯に山小屋四角張つて浮き 良坊
山小屋でねてバラックを思い出し 香車
山小屋で意気投合をして元氣 香平
山小屋の瓦が赤い地平線 芳仙
山小屋の壁に去年のカレンダー 十九平
山小屋の虹がきれいな雨上り いさむ
山小屋で切る罐詰のうまいこと 幸
山小屋も静かではない事を知り 建朗
山小屋の向うもマンボかけており 牧人
山小屋で若い日の歌思い出し 恵二朗
山小屋はめし炊くだけで暮れちま 古竹
山小屋の前で一枚まずベチリ 与呂志
山小屋の恋をやもりが見ていたり 雄々
熊の出る話に山小屋夜が更ける 藤波
山小屋へもう一息の汗を拭き 善坊
思春期の感傷をユツでカード切り 突
追い越したアベックも同じ山小屋 三六
山小屋の炊事は唄で出来上り 光郎
山小屋で女矢張り化粧をし 圭水
山小屋は山小屋らしく建っている 徳風
喫いつけてから山小屋の飯仕度 賀峯
山小屋で皆んなが賞める飯の出来 木魚
山小屋で雪を解かした茶を／＼ 香林
コーラスが聞えて山小屋朝になり 初甫
山小屋で思わぬ女の世話になり 七面山
山小屋で急に自殺がいやになり 明雄
死に／＼来た山小屋昔ののまんま 堰子
山小屋の灯をカブト虫のせきに来 五茶
山小屋へ山小屋／＼と／＼とかれ 同
山小屋をバックに頼母しく写り 清司
山小屋が見え出しヤッホ／＼ 松太

宣伝部

寺井 鋭々選

宣伝部見本の品を一つくれ 正郎
宣伝部突飛なことがして見たく 豊年
宣伝部草月流も習つて見 一机
宣伝部みんな美人にしてしま 牧人
宣伝部とは言うものの一人らし 木魚
宣伝部カー聞いて居ようが居るは 光郎
宣伝部車供ばかりに取りまかれ 静観堂
宣伝部他社の人気も探りに出 代仕男
宣伝部陣取り露店鼻をあげ 隆文
宣伝部商品熟知して居らず 和友
宣伝部など万年筆の叩き売り 雲平
宣伝部カー部長は乗つた事がなし 微醉
宣伝部で画伯の夢を持ちつゞけ 悟
一色の事でもめてる宣伝部 圭水
宣伝部に勤めるといふつり屋 声雄
コチコチの社長と合わぬ宣伝部 恵二朗
宣伝部酔えば芸術論も吐き 松太
御当地の良さを賞める宣伝部 万古
宣伝部デザイン／＼と一人居 明雄
宣伝部芸のないのは歩く役 鳥石
宣伝部スタン／＼派手な色で捺し 善坊
宣伝部派手な応対して帰り 黒天子
うた／＼舌打させる宣伝部 井蛙

宣伝部ある日は酒を飲まず役 雄々
宣伝部声の佳い娘を連れて行き トン坊
宣伝部路地の奥まで見逃さず 芳風
宣伝部カー／＼派手に村通過 迂川
訥弁が留守をしている宣伝部 三六
宣伝部スター気取の声を出し 徒子
毒舌を／＼有難う宣伝部 保夫
お富さんの盤がちびてる宣伝部 一策
アツと云ふ手が／＼宣伝部 ほか平
算盤にならぬと見ている宣伝部 賀峯
宣伝部そのスキヤンダル見逃さず 葉光
ゴシップの出所を秘める宣伝部 同
奇抜さを買われて宣伝部に勤め 七面山
宣伝部長オールドミスを二人持 同
宣伝部黙つて歩くコツも知り 香林
大型の名刺を持つた宣伝部 十九平
宣伝部買わねば損のように云い 同
宣伝部一ぱい広告のある宣伝部 芳の人
宣伝部古手が／＼／＼／＼／＼／＼ 良坊
宣伝部突に名文でつしやろな ほか平
宣伝部舎道宣伝部が鉢合わせ 万古
宣伝部に勤めて世間の陽を浴び 七面山
宣伝部傾く社運知りながら 春也
宣伝部部屋は／＼／＼／＼／＼ 賀峯
宣伝部部屋は／＼／＼／＼／＼ 葉光
宣伝部部屋は／＼／＼／＼／＼ 初甫
宣伝部部屋は／＼／＼／＼／＼ 柳嬰
宣伝部部屋は／＼／＼／＼／＼ 十九平
宣伝部部屋は／＼／＼／＼／＼ 不二
宣伝部部屋は／＼／＼／＼／＼ 香林
宣伝部部屋は／＼／＼／＼／＼ 同

いのちある句を創れ



投稿規定

用紙は原稿用紙文字は正
體開欄月日及場所記入
切毎月二〇日投稿先本社宛

本社川柳忌・山雨

楼追悼句会

九月三日

午後六時半
於光明寺

生駒に俗務の煩を避けて、只管書肆よりの単行本上梓に執筆の路郎師も、初代柳翁忌と、副主幹山雨楼追悼句会として、久方振りの出席である。当夜の柳話、柳翁の存命期と、過去十四五年間の現世相とを比較し類似したる世相に生れた柳祖の人物、その幾句眼を讀み、須らく川柳を以て人生を愉快に暮すこと、川柳で新しい人生を造成すべきであると説かれ、又福寿草句集上梓を喜ばれて謝詞を述べられた。後ち過般の「川柳まつり」路郎師選「子沢山」の第一席入賞者正本水客氏に路郎賞を、その所属大鉄局支部に榮ある優勝額を贈られ、次いで席、兼題の披露に入り、本日の不朽洞賞優勝カップは西村芳川氏が把握された。時に午後九時。

(座)

出席者 川路郎・へとち・笛生・紫香・いさむ・与呂志・水客・好郎・博也・點平・清潮・凡九郎・梅里・須加太・千草・多久志・一朗・文蝶・淡舟・雄声・恒明・一十・言也・淀月・美根二・ひろ

し・梅志・喜仙・香林・山茶花・水茶・古竹・文秋・豆秋・堰子・樹峯・沐天・晴真・白柳子・葉光・一三夫・省三・芳川・清子・一榮・操・万葉・潮花・保夫・彌三次・貴山・六竜子・都詩子・十悟・楳林・没食子・花香・たけはる・澄夫・竹莊・摩太郎・正斗・梨花・梨里・葦乃

兼題「詠」

麻生路郎選

さて「詠もやっぱり三日坊主」恒明
倦怠期ですよと詠堂に入り いさむ
酒の出る詠へ今日も誘われる 与呂志
十年も音痴のまゝの詠なり 白柳子
今宵楽しく詠も朗々と 一朗
「月給のうちサ」と社長の話き 正斗
招待の席で思わぬ詠が出 いさむ
仲人の知ってる詠只一つ 竹莊
口ずさみ乍ら詠の客が去に 紫香
素詠の手に追われる声でなし 恒明
花咲かば告げんと子供聞き覚え 没食子
うらぶれて詠の声もかすがち 清子
仲人の下手な詠も笑われず 摩太郎
詠曲の会へ出掛ける自家用車 竹莊
就職に趣味詠曲と書いておき 清子
めでたけれど解が解っている詠 梅里
末席が年輪を入れた詠なり 楳林
署長今日傍でかしまる詠 淀月
観世流ですかと知ったかぶり言 豆秋
嫁ぐ氣がないのか詠習い出し 水客
末の子もいつしか詠聞きおほえ 一榮
高砂やだけを覚えて世話が好き 文秋
一二番覚ええた茶湯の詠 十悟
お目出度き詠を誰も聞いとらず 博也
お世辞だと知って詠きかきなり 葉光
お鏡子が冷めなくなってきた詠 秋

もれて来る詠に家がすぐわかり 文秋
詠などやって停年義やまれ 雄声
晩酌の詠に誰も居てくはず 堰子
別荘の近くに詠仲間居る 言也
詠曲になつて芸者は藝を置き 潮花
詠曲は不機嫌そうにうたうなり 一三夫
飛石に詠込みこむ秋となり 芳川
家を買う詠を習う忙しさ 路郎

兼題「木魚」

土井文蝶選

雑念を和尚木魚の音で消し 英断
娘のたゞく木魚の音はリズムめき いさむ
スクーター木魚の響く町を抜け 清潮
一周忌木魚たゞいて愚痴を言い ひろし
青春を木魚たゞいて過ぐす尼 同
押売りへ木魚は知らん顔で鳴り 六竜子
御仏へ細り切つて木魚の音 井平
就寝も飯も木魚が知らせて来 省三
仏にも人にも成れず打つ木魚 梅里
曉暗に木魚のひびく砂利を踏む 一朗
初盆を木魚の音に迎えられ 没食子
たゞかれることは木魚もニスが割け 梨花
喜怒哀楽木魚へ祖母の母が続き 梨花
坊さんが帰つて直ぐに子がたき じはる
極楽へぶら／＼行くと木魚の音 淡舟
仏具屋で老母は木魚の音を試め 言也
木魚の音へ皆善人の顔になり 初甫
一夜の宿を木魚に起される 恒明

兼題「駅長」

正本水客選

大臣の放談も出る 駅長室 笑太
通夜の座に駅長も来て詫言を述べ 梅里
僕一人御狼の汽車の駅長さん 十悟
明けの日は駅長釣りに行く姿 英断
駅長に言次ぎして乗る里の人 樹峯
駅長の時計が知つてゐる律儀 葉光
構内へ駅長未生流を活け 豆秋
駅長は日誌へ無事故と書いて寝る 淡舟
駅長の趣味鉢植のならぶ駅 山茶花
駅長の官舎は花が続くとこ 芳川
旧蹟に近く駅長ガイド兼ね 飄太
乗りおくれ客を駅長招き入れ 水茶
発車ベルではと駅長にもどる友 楳林
駅長の職にも政治性が要り 麦秋
靴音の割に小さい駅長さん 雄声
耐族へ駅長しばし策もなく 六竜子
駅長を呼べと傍若無人なり 言也
ラッシュアワーに立ち止つてゐる駅長 貴山
駅長にして鮎かけの名手たり 一十
駅長の帽子きちんとしてかぶり 紫香
終点でしたと駅長くびになり 省三
駅長も名士のひとり祝辞読む 恒明
駅長も出て貸切りの子を数え 梨花
名士のつりか駅長室に這入り込め 楳林
駅長のお紐をした不安な日 山茶花
ブラットの花前の駅長さんの趣味 水客

兼題「本場」

富岡淡舟選

博多ぶし本場で聞けばちと違い 万葉
三味線にあはぬ本場の唄を出し 紫香
贈り物やつぱり本場の茶にしよう 操
方言を本場でこなす宮田輝 淀月
フラダンス本場ハワイの皮膚の色 一三夫
酒くさい娯を本場で通りぬけ 梅志
本場だけあつてリンゴのような顔 都詩子
賑やかな宣伝で来た本場物 麦秋

本場にはない三味線の手を弾かれ
安来節踊る本場の尻からげ
皿洗いして来た丈の本場です
眠降りたところから本場らしい店
あら巻の本場で育ち鮭ざらい
京訛り本場のすくき持つて来る
富有柿の本場で丸のまゝで出し
のし紙の粗品本場の味でよし
さすが本場仕込みと唄をほめられ
商魂は本場同志でいがみあい
本場物まともちよびり切つてくれ
本場から来た姐さんの紺緋
潮の香と酒の香りの西宮
下の関本場の河豚を喰べに降り
信州の茶店で喰つたそばの味
本場もんから値段もはりまつせ
雑詰にされて本場の味が脱け
本場だつせと女将如才なし
本場から買つて帰つて値段みされ
傘さして本場の蒲萄にふれてみる
こんな物やっぱり本場の判があり
酔うほどに本場仕込みの安来節
久々の友が本場の味を揚げ
伝説がほそくつづいてる本場
長旅に本場の香り少し消え
黙つて本場の味をほめてくれ
国訛り添えて本場の味を売り
三夫

梅志
没食子
凡九郎
紫香
淀月
へとち
梅志
いさむ
竹莊
紫香
雄声
清子
須賀太
瓢太
貴山
文蝶
同
水客
与呂志
一三夫
六竜子
葉光
いさむ
水客
一三夫

気の毒なけれど徹夜でましとき
土曜日の麻雀徹夜してしまひ
徹夜して苦にもならない若さなり
徹夜して話がついた離縁状
出来ぬ子に限つて徹夜の試験前
徹夜してかえつて妻にうたがわれ
徹夜して明日の見合いの帯を縫い
常が常だから徹夜をうたがわれ
徹夜までする子に母も眠られず
徹夜ふと早出の靴の音をきき
スキッチを切つた徹夜朝のお茶
徹夜する夫へ妻も縫い急ぐ
徹夜して子の宿題をまとめあげ
徹夜する前で止つたワタタン屋
徹夜もう宵のお酒が覚めて来た
キヤバレののきき徹夜の窓へ見え
オロ／＼と子の看病にする徹夜
徹夜してやつと生れた男の子
徹夜して納めた品へ延べ手形
徹夜して書く原稿の字が歪み
徹夜してまでもラジオを組む若さ
徹夜しているのを猫に覗かれる
職人の徹夜は月も見ずに明け
宿直へ徹夜の麻雀持ち込まれ
労資共徹夜したまゝストに入り
迷宮をおそる徹夜の本部の灯
徹夜する夜警へ月がきれい過ぎ
女房にすまん徹夜をして戻り
久し振りに逢えば徹夜で話しこみ
三

花香
一ノ十
多久志
楢林
山茶花
ひろし
葉光
文秋
潮花
文蝶
水客
一ノ十
文蝶
潮花
山茶花
井平
清潮
栄
没食子
梅志
豆秋
香林
水客
いさむ
黙平
水客
梅里
竹莊
九尾潮花選

雑草のまん中へ牛放たれる
雑草を綺麗に取つた雨上り
雑草の様な生活で小さい幸
雑草を刈つて売地の札を立て
雑草の様にあつさり左遷され
雑草の生きたる強さを庶民持ち
雑草の様に生きルペンと云われ
此処まで水が来ていると云ふ草の向き
雑草のように刈られて又軍備
一本の草にも春の息吹き知る
坪十万円へ雑草速處せず
肥やつて育てよみた草だった
雑草の庭を母だけ気にしてる
雑草のなかへ目出度い杭を打ち
壁に塗る土へ雑草根を下ろし
雑草へ螢の夢の美しく
三

笛生
言也
凡九郎
淀月
省三
文秋
水客
水客
正斗
香林
省三
豆秋
博也
水客
白柳子
潮花
小川恒明選

特ダネになる失言をしてしまひ
これが特ダネかと叱られる新社員
特ダネをとつくにラジオ喋つてた
恒明
池田支部句会(大阪市)
八月二十三日
於 阪急電鉄本社食堂
黒川紫香報
駅前ラッシュの足が止る事故
古道具雑布で拭き値が決まり
雑布が干いたまゝに寮住い
恋人を姉姉らしく批判する
紫香
九月二十日
山の霧宿帳をかく手もとまで
甘党が幹事で旅行足が出ず
キヤラメルをつまむ社長に気がほぐれ
甘党は女に近い席を取り
胃のくすりのんで甘党またつまみ
替ズボン明日のプランに寝押する
替ズボンたまに秘密も見付られ
札ピラで買う愛情にも飽きて
名コンビ別々に来るインタビニュー
団体の中に笑わすコンビが居
紫香
九月二十日
於 摩天郎居
八木摩天郎報
口下手が冗談云つておこらせる
親だけでよい苦勞をば子にもさし
男苦勞白粉やけの顔も見せ
苦勞性人の事だが寝てられず
三等車秋の味覚が膝に揺れ
不渡の人とも見えぬ膝枕
まあ膝をくずせと意見ついでる
事務的に御苦勞さんとねぎられ
圭水

文秋
文蝶
恒明
紫香
古方
与呂志
凡九郎
たどし
いさむ
潮花
水客
紫香
狂二
圭水
好郎
圭水
春翠
摩天郎
好郎
圭水

虫籠の虫も祭の音を聞き 摩太郎
おしほりの付く定食の値を測り 玲人
好き嫌いあつて定食鉢を替え 貴山
定食に幹事追加を受付けず 同
定食を中に債務者債権者 摩太郎
定食へアメリカ帰りの手つき 好郎
三等の方へ乗りたい一人旅 雄声
サーカスのジンタが寂しい一人旅 玲人
さかすきの置場淋しい一人旅 夕霧
一人旅肌身離さぬ守り札 圭水

京都支部句会（京都市）

九月十六日 於 仲源寺

十円で手順の楽し給細工 鳥雀
嘘つきの嘘にも手順のある話 磯
本職を問われ周囲の顔を見る 龜一
本職ににぎられたなと鰻 紫蘭
昔から鐘は平和を告げている 憲一郎
露白しこの道父の墓へ行く 風太郎
宣伝車黙って帰る道となり 司郎
子を寝さす昔々と親が寝る 光二郎
此の道の細さに葛の花が咲き 義行
道連れの娘の案内で峠越す 親生
此の道は故郷へつゞく汽車の窓 たよし

川 篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼報

満月へ未練な窓を締めて寝る 富士子
バスの窓何か云つたが聞けなんだ 文平
窓あけてうれしい雨に手を合せ 枝葉
台風が近づき窓によろい着せ 柳常
窓にさす光へ蒲団未だかぶり 鈴江
イエスノー窮して窓によりかかり 初穂
ときめきを窓へ逃れた純情さ 無聖

窓開けて未だ寝足らぬと云う欠伸 無鬼
もう一行の署名へ坊やの名前借り 富士子
署名簿へ恋しい人の名もしらべ 蕉
事なかれ主義が署名を軽く受け 洋牛
駆け出しのスターはサイン苦にもせず 一風
発起人の顔だけ立てゝいる署名 左文字
署名する鼻につかえる菊の花 ひか平
就職の返事はこわい様に待ち 光子
御返事に困った筆のはかどらず 小菊
いゝ返事出来ず手をもむ膝の上 文子
年頃はどうやら返事待つレター 白猫児
気に入らぬ用事へ返事生ぬるく 雀子
ふて寝して返事しようかしよまいか 三枝
諦めていたのに返事来て迷い 凡志
うなづいて返事をしなが泣いてた 越山
捕まえた虫も頼みの頭下げ 昌代
水すまし水中マンボと云う姿 千枝子
虫の音に二人の話未だつきず 幸代
悪人の返事はそつと寝間で書き 一葉
一年生ハイの返事がマア大き 実葉
返事する方が疲れる話好き 若葉
夢中の口づけへのびる窓の月 志峰
アパートの窓はズロース又おしめ 梅枝
どの窓も温泉行と云うお顔 一雨
大臣の署名は印刷されてあり 愉多可
願ふれを見てわからずに署名する 初音
差向いお贈一つですましていい 徒然
言ひそびれたたまゝの視線の差向い 無聖

川 篠山電々（兵庫県）
山支部 グループ句会

於 篠山電々寮

赤トンボふえて鎮守の村祭 柳常
だまらせておいてトンボを輪をつくり 鈴江
一服は鉄にトンボを止めて吸い 精一

トンボ追う子を見て亡き子がしはれる 幸世
さゝやきの部屋へ邪魔する鬼やんま 美津子
海水浴プランのまゝで秋が来る 十枝子
プランではもう今頃は家が建ち 迷子
今度こそんと言わせるプラン立て 元男
連休に雨を忘れたプラン組み 太一
浴衣着てからは二派になるプラン 左文字
回覧の旅行プランにけちをつけ 念坊

川 出雲支部句会（出雲市）

九月十七日 於 教育委員会
尼祿之助報

兄さんにわからぬ笑いあねいもと まき子
まゝごとの姉妹へ農繁たそがれて 独仙
ドイツ語で相当悪いように医者 李明
カーテンを医者冷静な顔でしめ 勉
会費だけ飲んだら帰る席につき 雪平
会費千円ずらり発起の名が並び 岬月

川 備前支部句会（岡山県）

八月二十七日 於 娘句楽居
浜田久米雄報

中元に粗品を送り義理がすみ 操
役得の粗品黙ってもらつとき 淨美
配達車粗品の包山と積み 三晃
粗品でも忘れぬ義理を喜ばれ 娘句楽
苦勞した中味粗品と書いてだし 久米雄
片言で持つて来さした煙草盆 吉美
片言の意味が母さんには判り 柳風子
片言がうっかり聞けぬことをい 三六
片言を母が訳して笑わせる 青樹
片言が通夜の席を皆泣かせ 泣虫
食堂車座席のことも気にかゝり 白李
食堂車母のムスビへ気をつかい 泣虫
食堂車だけが空いてて席がなし 東岸子

川 倉敷支部句会（倉敷市）

田垣方大報

誘惑の手紙に机あきれとり 一念
机にも礼をのべたい退職日 宗歩
机上論現場の技師に叱られて 可笑
好きな人の机を一番さきにふき 素身郎
賞状を授ける机が高く見え 鼓草
流行も知らず楽しい野良仕事 苦楽
流行の服はウドンで風がすみ 千古
家出の娘流行の服で戻つて来 泥魚
流行を追う後添に酷使され 春也
流行は去年の服へケチをつけ まり子
流行をそのまゝとつた五頭身 愁水
流行をせめて追う気の染め直し 桂月
流行に遠く小島の灯を守る 春日
調理場へ刺身のベルがせき立てる 広志
魚釣が日曜と言う卒の数 遠也
釣天狗だけに魚の値にくわし 千容
秋刀魚焼く隣りの煙がうきで来 実穂
童話劇場になる子は羨まれ 春日
立話籠から見えている秋刀魚 万坊
どう工面したか門出の頭つき 承平
魚屋の仕入を軽くする暑さ 千代春

季節一品料理
江戸前にぎりすし
アベノ橋地下映画食通街

梅里の店 大萬

★大万川柳（第五十七回）を募る
兼題「友 情」路郎先生選

締切・十一月十五日（句数五句以内）
発表・十一月二十一日（店西掲示）
授句は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

応接間金魚が動くだけの屋
魚族には無い縄張り漁夫が持
蒲鉾にして前世をこまかす気
頭から足の先まで見た横目
妻は生地僕は売り子を横目で見
目と違う方へ万引手が動き
かあやんの横目とちやんだまらる
感激のチープが海へ長く引き
へたくそなサインを抱いて感激し
感激にテーパーゴダー声もなし
優勝の感激三振くつたのもまじり
駅頭の対面たぐだ涙だけ
感激の表彰台でつまずき
ニコソンの感激知事の手を握り
樹飲みをして人生の裏を行き
生活の程もしてのるに旅行
ぎり／＼の予算で旅行好き出かけ
旅行なとシキレて居る帰休令
計画で終る旅行へ地図を出し
二等車の旅行のんびりホームを見
二次会の盃頭の上を飛び
飛び込んだ迄は覚えてるベッ
耕流明万不一晴七面山
水風心古郎善生

赤坂支部句会 (岡山県)

九月一日

於 戸川医院
政田大介報

御近所の予想と別なところへ嫁き
絶対と云う予想屋が買うていず
母と子の予想が違ふ傘がもめ
八百長があると予想屋も知らず
生意気な顔がニキビを持てあまじ
十代の云う生意気は民主主義
生意気な顔もあつたと通話集
「騒がしい」と明治生が云うメンボ
胸騒ぎ押えて電報封を切り
来客へ騒がしすぎる子沢山
雨 水 陽 一 直 人 柳 李 白 三 六 菩 石 秋 月 泡 玉 軒 飄 山 沢 子 汎 山 飄 軒

陳情の汗へ税吏の冷たい臘
朝晩の冷えを神経痛が知り
本心の冷たさを知る横坐り
生さぬ仲何処か冷い笑いよう
金策がついて候補に立つときめ
金策の腕も社長格がつき
金策へ男の恥もすてゝ行き
退院を申し金策して歩き
一層逃げてやうかと金策行詰り
金策にこんな手があるとは知らず
金策へ易者の智慧も借りて見る
盆踊りまで豊作と云う活気
旧盆には来るかとパスの時間
淋しさはあの燈籠が母であり
盆踊り丸いほこりを立てゝ済み
利子だけを入れてお盆を済まし
赤錆給すい／＼盆を知らせに来
花 芳 玉 笑 千 土 冬 真 馬 佳 春 太 一 流 風 狂 青 承 平
蜂 流 露 陽 流 生 雨 佐 洗 目 仙 介 流 風 狂 青 承 平

大聖寺支部句会 (石川県)

九月十日

於 とよ居
野村味平報

痴漢出る噂夜道を怖く出る
夜道かけて越した峠も汽車通じ
月給日妻は夜道を迎えるに
山越えて夜道を急ぐ母の計に
遣散金を開いて夜道を引き返し
うぶな娘はただ酌ばかりして廻り
うぶ／＼と思つとる間に家出され
飲めぬのに割勘とられあはしく
にこ／＼と親娘は唄で障子張り
妻の欄一升瓶の減る速さ
そつと出て月の庭掃く病上り
ちろろ鳴く去年と同じ石の下
と 雅 光 明 久 味 一 恒 武 桃 醉 羊
郎 雄 平 郎 富 園 羊

木次支部句会 (島根県)

九月六日

於 小学校
藤井明朗報

九月六日

得心がゆかぬ所を金で付け
得心の行かぬまゝ出る社長宅
得心が行つて和解の酒を汲み
得心の行かない密附を払われ
算数へまだ得心のゆかぬ顔
もう一度頭を下げる所得税
もう一度でんぐり返し見る特価
臆病は登れず友の下駄の番
いゝ年は栗松茸も稲も出来
豊作を喜ぶ国のせまさ知る
二期期へ元氣を出せと通信簿
元氣な手母を支えて坂登る
正 雄
遊 子 歌 句 案 早 苗 富 士 子 詩 朗 俊 朗 同 朗 明 朗 清 夢 正 雄

高知支部句会 (高知市)

大西迷窓報

この想い届けとはかり書く日記
思い出しては二三日分日記つけ
父さんの病気が淋し子の日記
借金で済んで晩酌追加させ
借金で出来た夕食マ、淋し
借金の相談普段の声でなし
借金の目ぼしがついて良くなり
配給の量も台風まかせなり
神風は吹かず台風ばかり吹き
病床へ来て借金を言いそびれ
長男の育児日記はマメにつけ
しまふこと忘れた日記きにかり
日記から身の潔白が認められ
呑んで寝て宿直日記異状なし
入選をした日の日記太く書き
日記帳も雑記帳になつてゐる
内職の収入も書き込む日記帳
親に借る金は買った気で使い
郷愁のせめて日記へペンをとり
英 太 郎 時 明 白 眼 子 實 喜 守 次 郎 英 志 真 砂 人 貫 一 隆 野 永 由 紀 子 嘘 八 節 直 喜 竹 比 呂 善 介 久 平 已 康 平

米子支部句会 (米子市)

九月十一日

於 松露川柳会館
井上戯耕報

日記から自殺の説が強くなり
いさかいの其の日日記の文字乱れ
大物が来るぞとちぎれ雲が飛び
借金に触れず暑中見舞来る
友情は怒つて利子を突き返し
元利合計ばんとおつたうまい酒
ためらつた愛の言葉は日記にし
御無沙汰を言つて借金取りに来る
イニシャルこゝから恋になる日記
虫の音が聞こえて台風遠ざかり
想い出の頁今宵もめくつてみ
迷 窓
水 鏡 雄 々 八 糸 庄 太 無 閑 紅 帆 江 枝 若 枝 戲 耕 美 笑 美 砂 男 一 机 三 水 無 粹 花 仙 春 月 尚 子 風 来

笑うてはすまぬ放言総動員 秋馬
お名前はおねと女房如才なし 日清
まだ何もしやべりもせぬにうら笑う ますは

南海電鉄川柳会 (大阪市)

7・8月から

粉浜親和寮
友淵貴山報

新聞で表紙までして読む悪書 隆章
没収の悪書を読んで巡査ヒマ 玲人
噴水も公園らしくをため 一好
重大な使命尾灯へ拳手の礼 武介
フルスピード尾灯山越え川を越え 圭水
終焉のテールランプへ草も寝る 玲人
作文に父は飲まない事にする 貴山
作文に先生を泣かす不倖せ 摩太郎
応援団宮の太鼓も繰出され 雄峯
試合タイム応援団へ向くテレビ 好郎
見物もして帰ります応援団 鳥庄
来年も来いと応援いたわれ 摩太郎
応援団ボール一つに沸きかえり 昭月
また駅へすれて止った試運転 好郎
試運転よそのお古と見せぬ色 圭水
試運転プラットの風巻いてゆき 梅志

大阪通信病院川柳会

橋本幸男報

血圧へ腹立てさせぬ氣を使い 春巢
入るあたり嫁はつまらぬ役をかい 喜勇
人間ドックに入れてもやにノイローゼ 春雄
注射さえてうては氣のすむノイローゼ みのる
ノイローゼは博士もチト困り 幸男
苦笑して父は無心をきいてやり 方正
月給の高を聞かれて苦笑い 春雄
内幕がすつかり知れて苦笑い 愛論
待ち呆けの顔せず岩波文庫読む 春巢

ひととけば昔の王は派手な恋 方正
豆殻も入れて貸出読まされる 草右
兄弟の読書文化と経済と 没食子
図書館もまだ宵のごと読書の灯 水楓
骨休めとしてY本を読みふけり 夏生
読書する間もないと主婦のぐち 竹青
月後れ買うて下宿の灯が明く 桃村
お見合の趣味は読書に決めておき 一ハナ子
放浪記読んでる若い妓の美貌 兎風

帝化川柳会 (大阪市)

九月二十一日

佐野白水報

白粉もつけず商家の妻多忙 雅堂
病床に起き臥しうすくく 一の字
白粉もつけず勝気な娘の素顔 一朗
五尺八寸へ白粉塗ったサンドマン 春潮
母代り白粉気なく生活被き 与呂志
おしやべりの相手も焦げる匂知り 京一樓
おしやべりがふさぎ込んでる不倖 六竜子
おしやべりが得意の話題に交えろ 甲子朗
おしやべりの種終点でやと切れ 華泉
娘三人しやべって笑つてはしやいで 辰始
おしやべりの女房無口をはがらり 葉乙女
豊作へまだ配給は六日分 白水
豊作ヘルートを外す珠を入れ 京一樓
豊作へミシンの月賦ねはりこみ 好祐
跡取りが出来ずじまいで年をとり 乱酔
跡取りの嫁は親爺が見つけて来 一平

3・3・3川柳会 (堺市)

於 島野工業検査室

川村好郎報

順番を待てず床屋を出てしまひ 雄声
順番が判らぬ程の子沢山 広平

腕さすりく注射の順を待ち 雪山
順番がやつと来てから判が要り 梅里
順番が来そうで音痴席を立ち 好郎
世話ずきが世話がつけるとして居 紋平
世話ずきが幹事の邊に又入り 夕霧
世話ずきが隣りの豆腐を買いに行き 狂二
世話好きが中風になつてんかまし 貴山
世話好きをかつくりのフランク 梨里
世話ずきへ誰かのツケも廻つて来 素男
世話好きは当分居れと白をもち 摩太郎
末席は水柱遺く見てるだけ 好郎
附合のよきはめられスッテンテン 素男
一匹も釣れず附合糸を垂れ 貴山
上役へ附合辞せぬ抜目なさ 狂二
手鉄で錦之助をば切つてやり 一葉
植木屋の鉄屋裏の耳に聞き 摩太郎
奥伝がちと泣きそうな花鉄 梅里
弁当はかくして食べる女同志 元歩

阪東ベルト川柳会 (神戸市)

飯尾寄与史報

子のくせを親ゆづりだといふ云う 三平
ふろしきが傘になる日の俄雨 村雨
この傘は時にはね除けの役目し 三平
俄雨鯛をつる氣で傘を貸し いなか
プラットののはしつこに降り開く傘 比加留
あるだけの傘で葬式もおくられ 寄与史

明和病院川柳青蛙会 (西宮市)

山本九里三報

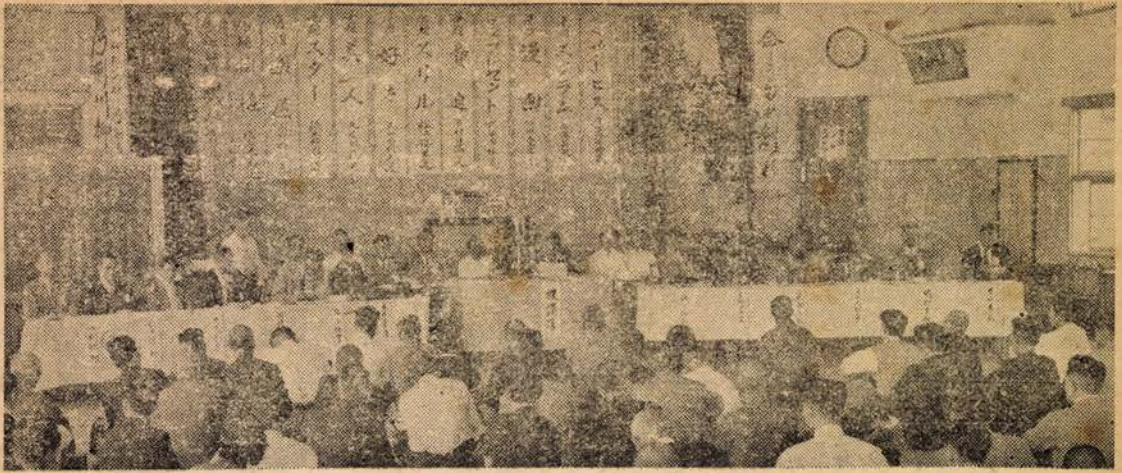
寝るだけが極楽である子沢山 三松
コンニチハ裸の午睡あわてさせ 語句童
手造のすし面会の母とたべ 葉芽露
遠足の子等すしをかえて喰べ 青葉
極楽の母は信じた灯をまもり 善坊

城東村青年團
川柳クラフ (兵庫縣)

出口白猫児報

鳩山をボツくそしる涼み台 一柳
ワイシャツの汚れで判る一人もの 昌三
カメラ持つその日は無理に氣が弾み 義雄
講習会余興の方に熱が入り 源泉
はげちやびん良い分別を作り出し 勝幸
鼻たれの頭を小使知つて 弘
青春に目覚めたらしいルージユなり 白猫児
遊ぶ日は惜しいような天気なり 清峰
アマチュアが写真屋を笑わせる 竜山
いゝ運に向いて何でも美味い膳 久巳
二次会になつてふさぎ云つて呉れ 秋峰
明日は旅心はすでに海にあり 功

品質優良
タチカワペン先
TACHIKAWA PEN
大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏



川柳支部前支主部主催本日川柳大会

柳界展望

葉町出雲
市教育委
員会社会
教育課内

▼本社（川柳文化）の夕句会を十一月十二日（第二主曜）午後六時半から下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催。文化月の行事、作句のシーズン、奮って来会されたい。▼南区医師会杏林川柳会は十月十八日午後七時半から一伸居で開催。▼大阪通信病院川柳会は十月一日（九月句会）と十月十五日午後二時から五階講堂で開催。▼南海電鉄川柳会は十月二十四日午後六時半から粉浜親和寮で開催。以上何れも路郎主幹出席。▼川柳淀川支部（大阪市）十一月句会は二日午後六時半から東淀川区三津屋北通四の二九香林居で開催。兼題「名曲」「空想」「頭」の三題。▼川柳出雲支部では出雲市教育委員会と共催十一月六日午後一時半から明願寺で出雲川柳大会開催兼題「六感」「美笑選（米子）」「先輩」「可明選（松江）」「仏」「緑之助選（出雲）」「隣り」綾美選（木次）」「無駄」天痴入選（松江）各題五句三〇円同封。詳細は出雲市若

川柳大会事務局へ問合せられたい。▼堺川柳人グループ主催堺市第九回文化祭協賛の川柳大会は十一月二十日（日）午後一時から大小路堺労働会館で開催される。▼川柳米子支部では米子市文化祭に山陰日新聞社と共催で三嶋美笑作品展を十一月十二日―十四日米子市教育委員会後援の下に米子駅前判沢ホールで開催。▼第七回大阪市市民川柳大会各派打合会を十月十五日午後七時から三休橋中島生々庵居で開催。▼3・3・3川柳会（堺市）は南海電鉄川柳会と共に十月一日午後六時堺東駅集合高野山西光寺に一泊。一周年記念句会開催参加会員二十名感興裡に二日夕下山。▼川柳阿倍野支部（大阪市）十月句会は二十日午後五時半西光寺で開催。▼川柳玉造支部（大阪市）十月句会は桃園川柳会と第一回合同句会を十月十五日午後六時から大阪信用金庫玉造支店階上で開催。▼川柳米子支部は十月句会を九日川柳会館

で開催。▼川柳堺支部十月句会は二十日午後六時半から摩太郎居で開催。▼川柳池田支部（池田市）十月句会は十八日午後五時半から梅田阪急電鉄本社地下食堂で開催。▼川柳赤坂支部（岡山県）九月句会を十月一日戸川医院で開催。▼交通局川柳会（大阪市）十月句会は十九日午後五時から交通局病院サニールムで開催。▼川柳弓削支部は十月句会を八日弓削駅長官舎で開催した。▼川柳玉造支部（大阪市）からほり川柳会は十月一日藤井寺翠香居にて、十六夜観月句会開催。▼川柳倉敷支部（岡山県）は十月句会を九日に南中学校で開催。▼川柳米子支部句会を九月十一日午後六時から川柳会館で開催。▼川柳大原支部（岡山県）十月句会は七日午後六時半から、ゆたか居で開催。▼葦川柳会（松江市）は、九月二十三日創立三周年記念川柳大会を島根療養所で開催。▼三井造船川柳例会（玉野市）を九月二十六日夕、三友クラブで開催。▼日赤黄島川柳会（岡山市）は十月八日午後五時から日赤支部で開催。▼川柳備前支部（岡山県）九月例会を十日午後六時から町役場で開催。▼川柳大原支部は、服部十九平氏来町偶会を九月二十日午後六時から黒住教会所で開催。▼初代川柳句碑再建委員会企画の句碑が東京竜宝寺に九月十五日再建、三太郎、雀郎、周魚、〇丸、二恵の諸氏等から寄書に本社に寄せられた。▼長屋第八輯が出た発行所は東京都日本橋区人形町三ノ四川柳長屋連、定価一〇〇円。▼川柳七草会（岡山県）から長島愛生園の川柳句集「七草」が刊行された。（非売品）▼前田雀郎氏（東京都）は俳誌「草茎」十月号に「川柳墮落の一因」を執筆された。なお同氏宅に今回電話通話された。大塚⑧八七一八番（摩）

小児科

平尾 醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
電話 戎 一六四三番

不朽洞

会から

▼西尾栗氏、(大阪市)は十月七日八尾市教育委員視察に参加、栗津温泉法師旅館から「温泉やよう寝た話と寝ぬ話」の旅信を寄せられた。▼不二田一三夫氏(大阪市)は朝日新聞の「新生活運動標語」に入賞された。同氏は十月十五日金沢へ旅行された由。なお山中温泉から「こほろぎ橋音も入りたい写真撮り」の句信を寄せられた。▼川村好郎氏(大阪府)は、3・3・3川柳会結成一周年記念句会に参加一泊「高野へ来てまでアベックにあてられる」の句信を寄せられた。▼富岡渡母氏(大阪市)は十月九日から二泊三日で白浜温泉に遊ばれ「三段壁心中にもってこいの場所」の句信を寄せられた。▼路郎先生夫妻は十月廿三日川柳會生川支部主催詩句会へ招かれ不朽洞会理事長北川博士と共に出席された。▼築山快夢起氏(ホノル、市)は訪日以來東京を中心に各地を巡遊されていたが、十月十七日朝の急行で西下、京都を中心に数日間、二十三日大阪、大阪中心に五日間は日光の旅を続けられ、二十五日不朽洞会の有志懇談会に出席、岡山、高松を経て夫人の郷里香川県高松へ向われる由、長途の旅に御夫妻の健康を祈る。▼福田山雨樓氏清美未亡人(横浜市)は最近郷里岡山県に帰

省されていたが今後とも山雨樓氏終焉の地横浜市に永住されるとのこと。▼西日本川柳大会へは本会から路郎先生、梨里、香林、潮花、好郎、梅里、恒明の諸氏が出席された。出席者百七十名で大盛況だったと▼永田六竜子氏(大阪市)は熊本市の柳誌「竜灯」の特別選を引受け選句発表された。なお十

柳人交年賀廣告募る

川柳雜誌社

新泰号へ貴方の年賀廣告を

★一口金二百円。

幾口でも申込んで

下さい一口口分の

原稿は住所と姓と

雅号程度。活字指

定はおまかせ願ひ

ます一口口分は五

分の一段組三行。

★原稿締切は十一月

末日着便

★廣告料は前金のこ

と(郵券代用でも

よろしい)

月十六日淡路江井に遊ばれた。

▼友淵貴山氏(大阪府)は3・3・3川柳會記念句会に参加「善人の姿になって奥の院」の旅信を寄せられた。▼麻生路郎先生は山陽新聞社社会事業団主催の「歳末同情義金造成書画工芸展」に本年も揮毫作品を贈られることとなった。

▼坂田良坊氏(下関市)は九月十

五日福岡九州大学精神科教授室へ出張、帰途別府、雲仙に巡遊帰関された。▼福田安夢氏(大阪市)宅に十月三日から電話開通天下茶屋(〇五五三番)。

▼麻生路郎先生は十月三十日貝塚市の体温川柳句会に出席される。▼私は堺市保護協会機関誌「観護だより」九月号に「女性と川柳」を執筆した。なお十月十五日夜、荊妻同伴東上する。

▼節間杏花氏は一身上の都合により中塚夢生氏は家事の都合により岩田一夜氏は病氣療養のため、いずれも九月限り退会。

新会員紹介

十月

金井文秋(大阪市)正 賀峰氏推薦

大橋遊子(岡山県)正 鉄児氏推薦

近藤青柳(岡山県)正

戸田喜楽(岡山県)正

千田凡章(岡山県)正

笹野旭子(岡山県)正

以上四名 七面山氏推薦

新岡回天子(唐津市)正

池田古心(岡山県)正 藤波氏推薦

十九平氏推薦

正誤

▼十月号二四頁上から三段、後から六行目「お寺の奥さんを権妻」は「二号」のことを権妻に訂正。

三五頁上から七段、後から二行目秋津は津秋の誤植につき訂正。



公・私・雑・記

★僕が夏から秋にかけて、力を入れていたその仕事も片づいたので今まで通り、私一人に三つの大机を占領してガン張る生活に戻った。★大阪市民川柳大会が段々マシネリズムな会合になって行くので、昨年の大会の席上から私見を述べたが、本年は市も教育委員会も在阪各社私の意見を快く容れてくれた方針で行くようである。どうせ一ペンに素派らしいものにはならなくても、絶えず熱意をもってことに当ることは必要だ。★赤い灯、青い灯の歌詞を作った日比繁治郎氏に消頌堀中心に執筆を頼むこととなった。大阪の芝居街にその生涯をささげて来られた人だけに尊い文獻が建設されてゆくことと思う。御愛読を願う。★また恒例による「柳人交歓年賀廣告」をお願いする。

社の黒板

★芝原悠介君が家事の都合上退社した。近く東京都に在住される。

★川柳雜誌社支部新設を希望される方は支部係宛に規則書を請求されたい。(略)

募 集

課題吟募集

財 布(廿句まで)大西 八歩選
見 学(廿句まで)武部 香林選
陳 情(廿句まで)戸田 古方選
預 金(廿句まで)田中 烏雀選
前号締切日限植につき
全部十一月二十日締切

毎号募集

近作柳梅(雜詠廿句)麻生路郎選
川 柳 塔(雜 詠)北川春雄選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る。
▲「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雜誌 第十一号

定価 四〇円

B列5号 毎月一回一日発行
半ヶ年 二六四円
一ヶ年 五二八円

(戦時禁) 昭和三十年十月廿五日印刷
昭和三十年十一月一日発行

Printed in Japan

川柳雜誌社

発行所 川柳雜誌社
大阪市住吉区南瓦町五丁目二五番地
電話 住吉 六〇八一
代印 大泉 七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 342

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

高血圧
忘れよう!
サーピナ錠



1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠! 成分含量も多くてお得です

山之内

スモートを
着心地のよい

O.S.K.の
レディメイド

警務 大坂商店
大坂市東区長堀町一丁目ニホ
電話 (94) 1745-1163 番

フシストツブ

牛滝・犬鳴号特發

なんば発 9時20分 (日曜・祝日ごと)

もみじの名所
牛 滝 山
圓目券 なんばより 250円

犬 鳴 山
圓目券 なんばより 250円

もみじ館 クーポン 650円
(なんばを往復運賃・スキ校・飯付)



南海電車